

文化庁委託 日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業

北海道胆振地域 日本語学習支援者養成事業報告書

実施期間

令和3年6月(契約日)～令和4年3月18日

実施団体

学校法人 北斗文化学園

はじめに

北海道は、人口の多くが札幌市を中心に偏在し、地方に行くほど、過疎が進む地域があり、生産年齢人口が不足し、自ずと、地域の経済や産業を支える存在として外国人材が増加しています。

新型コロナウイルスの感染拡大により、一時は、新規入国が制限されていましたが、いわゆる「水際対策」が緩和されはじめている現在、今後は本事業を実施させて頂いた北海道胆振地区でも、地域社会を支える外国人の入国の増加が見込まれます。

コロナ禍以前から、地域社会で生活する外国人を支えさせて頂くことに対して北海道では、文化庁の『報告書』（日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版 平成31年3月 文化庁文化審議会国語分科会）に依拠する研修などありませんでした。

そのような中、本学園は、令和3年度、北海道として初めて本事業の受託者として採択を頂き、研修を構成する委員会、研修講師のメンバーに、日本語教師養成と日本語教育振興に尽力された中川かず子氏（本学園日本語教育研究所所長、北海学園大学名誉教授）をはじめ、北海道内在住の大学教員、道内を含め全国から地域の外国人支援活動の専門家等を迎えることができました。皆様のお力添えがあつて研修の船出ができたことを有難く思います。

本事業の研修を受講される参加者が、その後、地域で暮らす外国人、すなわち「日本語学習者」と接するときには、相手を尊重し、対等性を保つことの大切さを知ること、相互理解が進み、多文化共生社会の実現に尽力する人材養成をその旨とさせて頂きました。

この度、報告書を上梓させて頂くまでには、その事業採択に向けて、応募の段階から多くの方々から、また関係する各機関には並みならぬご協力を頂いて参りました。これからも、皆様のご期待と信頼に応えられる地域唯一の「告示日本語教育機関」として、その役割を果たして参る所存です。

本事業の実施にあたり、ご理解を頂きご指導を賜りました文化庁国語課日本語教育指導・普及係、北海道胆振総合振興局、室蘭市、伊達市、苫小牧市の関係者各位に衷心より厚く御礼を申し上げます。

学校法人 北斗文化学園北海道福祉教育専門学校 校長
学校法人 北斗文化学園 副理事長

澤田 乃基

目 次

はじめに（澤田本部長）	1
1. 事業概要	4
1.1 事業名称	4
1.2 事業目的	4
1.3 事業実施期間	4
1.4 事業内容	4
1.4.1 事業体制	5
1.4.2 事業の流れ（各委員会の検討内容）	6
2. 教育課程(カリキュラム)の検討	8
2.1 カリキュラム策定準備	8
2.1.1 日本語学習支援者の現状と胆振地域	8
2.1.2 地域の在住外国人の概況	9
2.1.3 研修カリキュラム案の設計	11
2.2 研修カリキュラム検討委員会	13
2.2.1 委員会開催日時	13
2.2.2 日本語学習支援者について	13
2.2.3 研修の目標(ゴール)について	13
2.2.4 策定したカリキュラム	15
3. 教材の検討・開発	17
3.1 教材・開発検討委員会--日程と検討内容	17
3.2 共通教材「そだねーファイル」について	18
3.3 各研修の流れと教材の使用について	19
4. 研修の実施	24
4.1 室蘭市での研修について	24
4.2 伊達市での研修について	29
4.3 苫小牧市での研修について	34
4.4 フォローアップ講座について(室蘭、伊達、苫小牧)	38

5.	研修・事業評価	39
5.1	研修評価検討委員会による評価、コメント	39
5.1.1	第1回研修評価検討委員会——室蘭市における研修評価	39
5.1.2	第2回研修評価検討委員会——伊達市における研修評価	40
5.1.3	第3回研修評価検討委員会——苫小牧市における研修評価	41
5.2	事業評価委員会による評価、総括	42
5.2.1	第1回事業評価委員会——室蘭、伊達における研修の評価、総括	42
5.2.2	第2回事業評価委員会——苫小牧を含む研修全体の評価、総括	43
おわりに	43-44
資料	45-67-
	各研修地域フライヤー、講座の様子、ふりかえり・復習シート、修了証サンプル	

1. 事業概要

1.1 事業名称

胆振地域における「日本語学習支援者」に対する研修カリキュラム等開発事業

1.2 事業目的

北海道胆振地区は4市(苫小牧、室蘭、伊達、登別)7町(むかわ、厚真、安平、白老、壮瞥、洞爺湖、豊浦)からなり、約41万人>(*2021年6月現在、うち外国人は1800人程度)が居住、一次から三次までの産業が充実している地域であるが、産業を支える多様な背景を持つ「生活者としての外国人」の数も増加している。しかし、外国人との共生の基盤となる日本語や日本文化の学習に関する支援は十分ではない。自治体も必要性を認識しているが、地域の人材や団体との協力関係が十分機能していないという問題がある。

この課題の解決に向けて、日本語学習支援者を地域に広げ、自治体と支援団体が連携して課題と取り組むために、胆振圏域管内唯一の告示日本語教育機関である本学園が胆振総合振興局の協力を得て本事業を実施した。これにより、今後さらに進むと予想される外国人との多文化共生社会に向けて貢献できる人材育成を目指すこととした。

今年度の取り組みの目標は、第一段階として、住民の多文化共生に向けた地域づくりへの意識醸成を優先すべきとした。研修内容も、多文化共生の基本理念である、外国人との「相互理解」、「対等性」、「協働(共に地域を支える活動)」を浸透させることを意識した。研修終了後は、受講生グループを中心に自治体と連携した活動を地域に起こせるよう本学園は推進役を果たしていく。

1.3 事業実施期間

令和3年6月(契約締結日)～令和4年3月18日(9か月間)

1.4 事業内容

事業実施に際し、胆振地域における日本語教育支援状況(日本語教室、日本語相談など)を調査した。今回の事業において対象地域としたのは、①外国人を含む人口が最も多く、多文化社会づくりに積極的な苫小牧市、②国立大学があり、留学生支援に関心のある市民が比較的多い室蘭市、③技能実習生が多く居住するが、企業と自治体とのつながりが薄い伊達市、の3市である。事業内容には地域の状況、居住外国人の特徴を反映させる必要があると考えた。また、事業の枠組み、研修カリキュラムの策定、研修教材等の開発に関して、文化庁報告書『日本語教育人材の養成・研修の在り方について』(改定版、2019年)の基本的方針が基になっている。また、他地域で実施された「学習支援者研修」事業の実績報告書も参考になった。

研修は各市とも、隔週の土曜日にテーマ別に各講座3時間で5講座(計15時間)実施

した。研修内容については次項でも説明するが、上掲の文化庁報告書にある「日本語学習支援者研修における教育内容(1)～(8)」(61 頁)及び「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」(34 頁)が本事業の研修内容に十分に反映されるよう設計されている。また、各講座に、「資質・能力」(34 頁)の「態度」として重要視される「相互理解」「対等性」「協働」の一部またはすべてが組み込まれ、意識醸成の促進を期待した。

5回の研修終了後は任意参加ではあるが「フォローアップ講座」としてオンライン講座を実施した。3 市とも自治体関係者をゲストに招き、研修後の活動について意見交換を行なった。研修終了後は、研修の検証と全体の事業評価を行なった。

事業の全体的な流れは、以下に示している。

【事業概要】

事前調査：既存の学習支援研修内容／胆振地域の学習支援状況と自治体



研修カリキュラムの検討

文化庁報告書『日本語教育人材の養成・研修の在り方』(2019年3月改定 34 頁、61 頁)の表11, 表22に基づく教育内容検討



教材の検討・開発～作成

地域を知るための学習項目、情報を盛り込む／「予習」「ふりかえり」「復習」シートにより授業の前、中、後でのふりかえりを継続する【「そだねーファイル」(ポートフォリオ型ファイル)】。グループワークによる連帯感、結束性を図る。



研修実施(対面研修+補完的なオンライン・フォローアップ研修)



研修の検証と事業評価(参加者のアンケート、ふり返りコメント分析)

1.4.1 事業体制

本事業は学校法人北斗文化学園北海道福祉教育専門学校(事務部)を事務局とし、道内外の有識者を委員として実施した。各委員会、委員一覧は以下の通り。

委員会・委員一覧

委員会名	氏名	所属・役職
①教育課程 (カリキュラム) 検討委員会	中川 かず子(委員長) 佐藤 公美 岡本 佐智子 丸島 歩 山路 奈保子 加藤 早苗 中河 和子 新居 みどり	北斗文化学園・日本語教育研究所 所長 北斗文化学園・日本語専任講師 北海道文教大学国際学部 教授 北海学園大学人文学部 准教授 室蘭工業大学国際交流センター 教授 インターカルト日本語学校 校長 トヤマヤポニカ 代表理事 NPO 法人国際活動市民中心 コーディネータ
②教材・開発 検討委員会	中川 かず子(委員長) 佐藤 公美 岡本 佐智子 丸島 歩 山路 奈保子	北斗文化学園・日本語教育研究所 所長 北斗文化学園・日本語専任講師 北海道文教大学国際学部 教授 北海学園大学人文学部 准教授 室蘭工業大学国際交流センター 教授
③研修評価 検討委員会	中川 かず子(委員長) 佐藤 公美 岡本 佐智子 丸島 歩 野々村 貴寅	北斗文化学園・日本語教育研究所 所長 北斗文化学園・日本語専任講師 北海道文教大学国際学部 教授 北海学園大学人文学部 准教授 北海道胆振総合振興局地域創生部 地域政策課 課長
④事業評価 委員会	中川 かず子(委員長) 佐藤 公美 樽見 弘紀 森谷 康文 野々村 貴寅	北斗文化学園・日本語教育研究所 所長 北斗文化学園・日本語専任講師 北海学園大学名誉教授・元日本 NPO 学会会長 北海道教育大学函館校 准教授 北海道胆振総合振興局地域創生部 地域政策課 課長

1.4.2 事業の流れ(各委員会の検討内容)

①教育課程(カリキュラム)検討委員会

第1回カリキュラム検討委員会(令和3年6月11日、15:00~16:30、オンライン開催)

—事業の背景と概要、研修の目標、研修実施場所と地域の情報についての確認を行ない、委員から明確な目標の設定の必要性、ふりかえりの結果を活動につなげることの有効性が議論された。

第2回カリキュラム検討委員会(令和3年6月18日、15:00~16:30、オンライン開催)

—第1回研修(室蘭市)の目標の確認(人材発掘、参加者の意識の醸成)、講座名を「外

国人とともに暮らす社会について考える講座」に変更することの確認、フォローアップ講座に自治体関係者を交え、行政との連携を図るとの説明がなされた。

第3回カリキュラム検討委員会(令和3年9月10日、15:00～16:30、オンライン開催)
—第1回研修(室蘭市)の報告、第2回研修(伊達市)の研修内容検討。研修により受講生の「意識醸成」、「活動への意欲等」の成果があったと報告された。テーマは共通であるが、2回目の研修では、より自治体との連携を推進させるための具体的活動を検討することとした。

第4回カリキュラム検討委員会(令和3年11月26日、15:00～16:30、オンライン開催)
—第2回研修(伊達市)の報告、第3回研修(苫小牧市)の研修内容検討。受講生の知識欲、経験値、能力が他地域に比べて高いと評価された。第2回研修の成果が確認され、第3回に向けて、地域の関連団体を調査し活動の連携を推進するよう提言がなされた。

②教材・開発検討委員会

第1回教材・開発検討委員会(令和3年6月18日、16:30～18:00、オンライン開催)
—カリキュラム委員会で示された研修目標に向けて、どのような教材を用いて研修を進めるか具体的な流れを検討。

第2回教材・開発検討委員会(令和3年9月10日、16:30～18:00、オンライン開催)
—室蘭市の研修終了後、受講生のふりかえり、アンケート等からの情報を基に、使用された教材と研修内容との適合性及び修正すべき点や課題を検討した。

第3回教材・開発検討委員会(令和3年11月26日、16:30～18:00、オンライン開催)
—伊達市の研修終了後、第2回委員会と同様の手続きで、研修内容と教材の評価と改善に向けての検討を行なった。

③研修評価検討委員会

第1回研修評価検討委員会(令和3年9月9日、14:00～15:30、オンライン開催)
—第1回研修(室蘭市)終了後の総括、評価(講座内容、受講生、講師のふりかえり内容、アンケート調査結果の分析による)

第2回研修評価検討委員会(令和3年11月25日、14:00～15:30、オンライン開催)
—第2回研修(伊達市)終了後の総括、評価(講座内容、受講生、講師のふりかえり内容、アンケート調査結果の分析による)

第3回研修評価検討委員会(令和4年3月3日、14:00～15:30、オンライン開催)
—第3回研修(苫小牧市)終了後の総括、評価(講座内容、受講生、講師のふりかえり内容、アンケート調査結果の分析による)

④事業評価委員会

第1回事業評価委員会(令和3年12月3日、15:00～16:30、オンライン開催)

—第1回、第2回研修(室蘭市、伊達市)について、カリキュラム・教材開発、研修の内容と成果を総括、評価

第2回事業評価委員会(令和4年3月4日、15:00~16:30、オンライン開催)

—第3回研修(苫小牧市)の研修評価検討委員会報告を受け、第1回~第3回までの研修全体の内容と成果を総括、評価、今後の課題

2. 教育課程(カリキュラム)*の検討 (以下、「カリキュラム」という用語を使用する。)

2.1 カリキュラム策定準備

2.1.1 日本語学習支援者の現状と胆振地域

4市7町からなる胆振地域の中で、室蘭市、伊達市、苫小牧市を研修会場に選ぶことになった理由は、居住外国人の人数、在留資格が異なり、その結果、住民や自治体の「日本語学習支援」に対する意識や考え方に違いが見られると考えたことが大きい。

本学園では、すでに3市の外国人居住状況や「学習支援者」に該当する市民や団体について調査を行なった。

苫小牧市には国際交流員(ALT)や外国人の非常勤職員が国際交流部門(国際リゾート戦略室)に配置されているほか、「外国人相談窓口(多言語による)」の設置(2020年4月~)、「初任日本語教師養成講座」(オンライン、外部委託)の実施など、在住外国人への日本語支援につながる動きが進められている。さらに、令和3年3月に策定された「苫小牧市『都市再生』プラン」の要素の一つに「多文化共生の地域づくり」を盛り込み、今後、共生社会への動きとともに、地域の日本語学習支援者の必要性が高まっていくと思われる。実際、2022年1月に市内の活動団体による「多文化共生の実現に向けて」というテーマで意見交換会が行われ、「やさしい日本語の普及」、「外国人技能実習生を対象とした防災教育の実践」、「留学生に対する職業教育」、「日本語学校の開設準備」、「大学とつなぐと地域の多文化共生」等に取り組む団体の取り組みが紹介された。

一方、室蘭市には多くの国際交流団体が加盟する国際交流推進協議会があるものの、「学習支援」につながる活動はまだ多くはない。市国際課によると、これまで「姉妹都市交流」「留学生との交流」といった「交流事業」が中心になってきたという。ただ、長年続いているボランティア日本語サロン(2009年~現在)のほか、「留学生フレンドシップ」といった、元々室蘭工大の留学生とその関係者を対象とした支援者、支援団体もあり、市や道(HIECC)の支援を得ながら活動が続いている。「日本語サロン」は個人の活動であり、協力者、後継者が課題となる。「留学生フレンドシップ」は生活支援、就職支援のほか、最近では道の協力を得て「日本語教室」の開催にこぎつけている。市と道の支援、協力体制は今後の活動継続には欠かせないと思われる。

伊達市については、外国人の約6割近くが技能実習生である。日本語学習の必要性はあるものの、日本語教室は存在していない。外国人技能実習生を受け入れる伊達市船

岡町から西浜町、東浜町周辺の漁業、水産加工業者を中心に、住民の外国人との共生に関する意識調査を実施した(2021年9月)ところ、50人中36人から回答を得たが、61%が「交流に関心がある」、38%が「交流に関心がない」という結果であった。ただ、「交流に関心がない」住民も、「地域のルールと日本語を学習して、地域に溶け込んでほしい」と思う住民が多く、行政に「相談窓口」や「わかりやすい日本語や多言語表示」を望む声が複数見られた。本事業を契機に、市民と自治体関係者との連携による支援活動が行われることが望まれる。

表1に、「胆振地域の国際交流団体一覧」(胆振総合振興局より提供された資料に基づき、2021年9月現在活動しているものを掲載、個人活動家は含まない)を示す。

2.1.2 地域の在住外国人の概況

1) 室蘭市について (数字は2021年6月、法務省統計局より)

人口: 79,986人

外国人: 416人(0.5%)

国籍: 中国(37%) / ベトナム(17%) / 韓国(13.7%) / フィリピン(3.1%) / ネパール
インドネシア、タイ、米国ほか

在留資格: ①留学(49.5%) / ②特別永住者(12.7%) / ③永住者(9.8%) / ④技能実習(7.9%) / ⑤家族滞在(7.5%)ほか

2) 伊達市について (数字は2021年6月、法務省統計局より)

人口: 33,209人

外国人: 229人(0.7%)

国籍: ベトナム(50%) / 中国(29.4%) / 韓国(3.7%) / モンゴル、台湾ほか

在留資格: ①技能実習(55%) / ②永住者(9.6%) / ③特定活動(8%) / ④技能
(6/1%) / 国際業務ほか

3) 苫小牧市について (数字は2021年6月、法務省統計局より)

人口: 169,528人

外国人: 848人(0.5%)

国籍: ベトナム(35.2%) / 中国(16.5%) / 韓国(12.6%) / フィリピン(6.6%) /
ネパール、インドネシアほか

在留資格: ①技能実習(+特定技能)(16%) / ②特別永住者(13.2%) / ③永住者
(12.4%) / ④国際業務(8.4%) / 留学、家族滞在ほか

表1 【胆振地域・国際交流団体(活動中)一覧(個人を除く)】

道内国際交流団体一覧				
番号	振興局	市町村名	団体名	主な交流先
245	胆振	室蘭市	ノックスビルの会	米国・ノックスビル
246	胆振	室蘭市	室蘭市国際交流推進協議会	全般
247	胆振	室蘭市	日照市と友好の会	中国・日照市
248	胆振	室蘭市	留学生フレンドシップ	全般
249	胆振	苫小牧市	国際ソロプチミスト苫小牧	全般
250	胆振	苫小牧市	苫小牧キリスト教船員奉仕会	全般
251	胆振	苫小牧市	とまこまい国際交流センター	全般
252	胆振	苫小牧市	苫小牧ユネスコ協会	全般
253	胆振	苫小牧市	苫小牧日中友好促進協会	中国
254	胆振	苫小牧市	苫小牧ネパール協会	ネパール
255	胆振	苫小牧市	苫小牧ニュージーランド協会	ニュージーランド
256	胆振	苫小牧市	苫小牧ロータリークラブ	全般
257	胆振	苫小牧市	苫小牧北ロータリークラブ	全般
258	胆振	苫小牧市	苫小牧東ロータリークラブ	全般
259	胆振	苫小牧市	日本ユーラシア協会北海道連合会 苫小牧支部	ユーラシア地域
260	胆振	苫小牧市	日本中国友好協会苫小牧支部	中国
261	胆振	苫小牧市	苫小牧日台親善協会	台湾
262	胆振	苫小牧市	秦皇島市友好の会	中国・秦皇島市
263	胆振	苫小牧市	苫小牧ハスカップライオンズクラブ	全般
264	胆振	苫小牧市	苫小牧うぼぼ	全般
265	胆振	苫小牧市	(特非)エクスプローラー北海道	全般
266	胆振	苫小牧市	国際ソロプチミスト苫小牧はまなす	全般
267	胆振	登別市	のぼりべつ国際交流会	全般
268	胆振	登別市	登別デンマーク協会	デンマーク
269	胆振	登別市	登別日中友好協会	中国
270	胆振	登別市	国際ソロプチミスト登別	全般
271	胆振	登別市	登別ライオンズクラブ	全般
272	胆振	登別市	登別中央ライオンズクラブ	全般
273	胆振	登別市	登別ロータリークラブ	全般
274	胆振	伊達市	伊達日本中国友好協会	中国・福建省漳州市
275	胆振	伊達市	大滝国際フレンドシップ・クラブ	カナダ・ブリティッシュコロンビア州レイクカウチン
276	胆振	洞爺湖町	洞爺湖町国際交流の会	全般
277	胆振	洞爺湖町	洞爺国際交流協会	イギリス
278	胆振	洞爺湖町	洞爺湖日本中国友好協会	中国
279	胆振	壮瞥町	キートスクラブ	フィンランド
280	胆振	白老町	白老町姉妹都市協会	カナダ
281	胆振	白老町	ケネル白老フレンドシップクラブ	カナダ
282	胆振	安平町	安平町国際文化交流センター	全般

(2021年6月 胆振総合振興局資料に基づき作成)

2.1.3 研修カリキュラムの設計

「日本語教育人材養成・研修カリキュラム」の設計にあたり、文化庁報告書『日本語教育人材・研修の在り方について』【平成31年(2019年)、改定版】に基づき、34頁の表11「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」(A)と61頁の表22「日本語学習支援者研修における教育内容(1)～(8)」(B)を基本とし、その上で地域の特徴やニーズを勘案した。

(A)「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」【()内は本事業で加えられた視点】

- 「知識」 --- ①日本語や日本文化、社会、多文化共生に対する一般的知識・理解
 ②日本語教育に携わる機関・団体及び関係者による支援体制と自らに期待される役割についての理解 (胆振地域の情報を中心に)
 ③学習者の来日経緯、国や言語・文化背景、日本語の学習目的に対する一定の知識 (胆振地域在住外国人に対する知識、情報)
 ④異文化理解や異文化間コミュニケーション、コミュニケーション能力に関する基礎的な知識
 ⑤日本語の構造や日本語学習支援に関する基本的な知識
- 「技能」 --- ①分かりやすく伝えるために、学習者に合わせ自身の日本語を調整
 ②学習者の発話を促すために、耳を傾けるとともに自身の発話を調整
 ③日本語教育コーディネータや日本語教師と共に日本語学習を支援
 ④学習者の状況を観察し、日本語教師や日本語教育コーディネータの助言を得ながら、学習方法や学習内容を学習者に合わせて工夫
- 「態度」 --- ①学習者の背景や現状を理解しようとする (地域外国人との話し合い)。
 ②学習者の言語や文化を尊重し、対等な立場で接しようとする。
 ③学習者や支援者等と良好な対人関係を築こうとする。(対等・寛容性)
 ④学習者が自ら学ぶ力を育み、その学びに寄り添おうとする。
 ⑤異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を持つようとする。

日本語学習支援者に望まれる資質・能力

表11

	知識	技能	態度
日本語学習支援者	(1) 日本語や日本文化、社会、多文化共生に対する一般的知識・理解を持っている。 (2) 日本語教育に携わる機関・団体及び関係者による支援体制と自らに期待される役割について理解している。 (3) 学習者の来日の経緯、国や言語・文化背景、日本語の学習目的に対する一定の知識を持っている。 (4) 異文化理解や異文化間コミュニケーション、コミュニケーション能力に関する基礎的な知識を持っている。 (5) 日本語の構造や日本語学習支援に関する基本的な知識を持っている。	(1) 分かりやすく伝えるために、学習者に合わせて自身の日本語を調整することができる。 (2) 学習者の発話を促すために、耳を傾けるとともに自身の発話を調整することができる。 (3) 日本語教育コーディネータや日本語教師と共に、日本語学習を支援することができる。 (4) 学習者の状況を観察し、日本語教師や日本語教育コーディネータの助言を得ながら、学習方法や学習内容を学習者に合わせて工夫することができる。	(1) 学習者の背景や現状を理解しようとする。 (2) 学習者の言語や文化を尊重し、対等な立場で接しようとする。 (3) 学習者や支援者などと良好な対人関係を築こうとする。 (4) 学習者が自ら学ぶ力を育み、その学びに寄り添おうとする。 (5) 異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を持つようとする。

(備考) 表11「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」は、表1～10を前提とするものではない。

(B)「日本語学習支援者研修における教育内容」—(1)～(8)の「教育内容」(上記報告書 61 頁表 22)を基に、地域の特性やニーズを生かした学習内容を加えている。(例:「地域在住の外国人の状況」「地域言語の多様性」「地域情報に関するやさしい日本語の実践練習」「地域の多文化共生を考える」等)

教育内容：表 2 2

日本語学習支援者研修における教育内容

3 領域	5 区分	16 下位区分	教育内容	
コミュニケーション	社会・文化に関わる領域	①世界と日本	(1) 学習者の背景に対する理解 ・在留資格 ・国内の在留外国人 ・主な出身国の文化背景 ・来日理由, 日本における生活状況など	
		②異文化接触	(2) 多文化共生 ・地域の多文化共生施策 ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の目的・目標 ・地域日本語教育の実施体制と支援者の役割	
		③日本語教育の歴史と現状		
	教育に関わる領域	言語と社会	④言語と社会の関係	
			⑤言語使用と社会	(3) コミュニケーションストラテジー ・地域の「ことば」 ・「やさしい日本語」
			⑥異文化コミュニケーションと社会	(4) 異文化理解 ・異文化コミュニケーション
	言語に関わる領域	言語と心理	⑦言語理解の過程	
			⑧言語習得・発達	
			⑨異文化理解と心理	
	言語に関わる領域	言語と教育	⑩言語教育法・実習	(5) 地域日本語教育の多様性 ・地域の日本語教室の見学 ・学習者及び支援者との交流
			⑪異文化間教育とコミュニケーション教育	(6) 日本語学習支援 ・発話調整 ・傾聴 ・学習支援の流れ ・学習支援のリソース
			⑫言語教育と情報	(7) コミュニケーション教育
		言語	⑬言語の構造一般	
	⑭日本語の構造		(8) 日本語の構造	
	⑮言語研究			
	⑯コミュニケーション能力			

(備考) 関連ページ：p.34 表 11 「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」

2.2 研修カリキュラム検討委員会

2.2.1 開催日時

- 第 1 回委員会 令和 3 年 6 月 11 日(金) 15:00~16:30
- 第 2 回委員会 令和 3 年 6 月 18 日(金) 15:00~16:30
- 第 3 回委員会 令和 3 年 9 月 10 日(金) 15:00~16:30
- 第 4 回委員会 令和 3 年 11 月 26 日(金) 15:00~16:30

カリキュラム検討委員会では、日本語学習支援者の定義、研修の目標、研修内容の確認と研修後の評価に関する検討が行われた。(1.4.2 を参照)

2.2.2 日本語学習支援者について(定義、役割等)

カリキュラム検討委員会では、専門職としての日本語教師と日本語学習支援者とは異なり、学習支援者は、対等な立場で地域の外国人に接する態度、意識を持ち、教師やコーディネータ、自治体と連携、協働し、地域の多文化共生の実現に向けて活動する人達であることを確認した。(上記文化庁報告書 19 頁「日本語教育人材の役割」参照)

2.2.3 研修の目標(ゴール)について

カリキュラム検討委員会での委員によるコメントで、①カリキュラム開発事業は、一般には 2 年間取り、その 2 年間で完成版を作るべき、②日本語学習支援者の育成目標を明確に、③第1段階は「地域掘り起しのための畑の耕し」とし、第 2 段階で自治体を含めた計画案を示す、④「対等性」と「協働」の重要性、等が挙げられた。

これらを踏まえ、胆振地域の 3 市(室蘭・伊達・苫小牧)における研修講座(2021 年度)の全体的目標を、「地域社会の外国人との共生のために住民が何ができるかを考える機会にする」こととした。胆振を代表するこれら 3 市における多文化共生の地域づくりには、まず市民の意識啓発が優先課題であるということが聴き取り調査からも明らかになっている。そのために、多文化共生の基本理念である、外国人との①相互理解、②対等性、③協働(共に地域を支えるため)を各研修講座で浸透させることを意識した。

今年度の研修事業を基礎研修(第 1 段階)とし、第 2 段階では自治体と連携して活動を地域に根差していくことを視野に入れている。それに向けて、胆振総合振興局のほか、市役所や国際交流団体に働きかけ、市民との連携、協働的活動を実施していくことを確認した。

(図 1) 研修の目標(段階別に示したもの)

【多文化共生の地域づくり 基礎研修(第1段階)】

室蘭市、伊達市、苫小牧市での研修講座(2021年7月~2022年3月)

目的:住民の意識啓発、日本語学習支援者発掘



【研修終了後のフォローアップ講座(オンライン)任意参加】

目的:研修修了者と行政関係者との面談、活動の検討

⇒ 連携、協働の可能な活動を検討



研修期間中、自治体等と連携して日本人住民への「多文化共生」意識についての調査~ニーズ分析

2022年4月~(第2段階~実践的研修)

室蘭、伊達、苫小牧の各自治体と研修修了者による多文化共生の地域づくりの検討

北斗文化学園:活動の推進、調整役(ファシリテータ)の役割

(住民意識啓発セミナー、ボランティア教師研修、相談窓口の設置ほか)

2.2.4 策定したカリキュラム

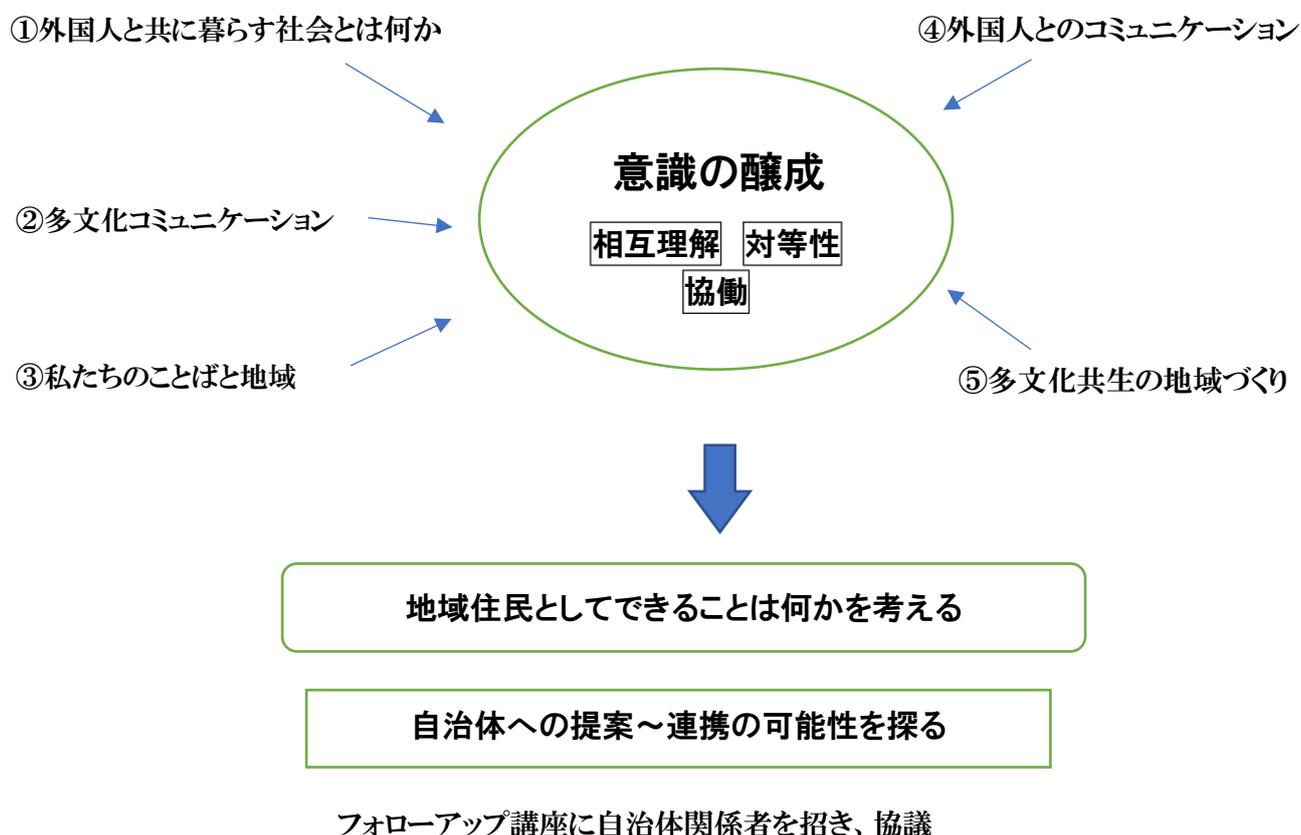
表 2

回	時間	テーマ	教育内容	求められる資質・能力		
				知識	技能	態度
1	3時間 13:00～ 16:00 以下同じ	外国人と共に暮らす社会とは何か	(1)地域の居住外国人の状況、日本語教育の状況、在留資格／地域、国の政策の変遷、政治と法律の動き等 (2) (地域の多文化共生施策) <u>地域日本語教育の実施状況～実施地域の事例から</u>	1,2,3	3	1,2
2	3時間	多文化コミュニケーション～相互理解に向けて	(4)異文化理解とコミュニケーション (7)コミュニケーション教育 ——日本語学習支援と文化理解をめざすコミュニケーションのあり方	4	3	2,5
3	3時間	私たちのことばと地域（方言・アイヌ語）	(3)コミュニケーションストラテジー 地域の「ことば」（方言、アイヌ語等） (8)日本語の構造、相対的な視点 コミュニケーションのための日本語の特徴 ——日本語の多様性	4,5	1,2	2,5
4	3時間	外国人とのコミュニケーション	(3)コミュニケーションストラテジー ——「やさしい日本語」、発話調整 (6)日本語学習支援——発話調整／傾聴／学習支援の流れ／学習支援のリソース	4,5	1,2	2,4,5
5	3時間	多文化共生の地域づくり	(2)多文化共生の定義／地域の施策／生活者としての外国人に対する日本語教育 (5) <u>地域日本語教室の多様性～地域日本語教室の活動事例</u> ／学習者及び支援者との交流（学習支援活動演習）	1,2	3,4	3,4,5

表中、「求められる資質・能力」の「知識・技能・態度」は上記報告書 34 頁表11の内容に沿っている。さらに、「教育内容」は上記報告書 61 頁、表 22 にある「学習支援者研修の教育内容 (1)～(8)と関連させている。

この研修カリキュラムと研修目標を図式化すると、以下のようになる。

図2 研修内容(5回の講座)と目標



講座1～5とも、講師による講義や事例紹介(情報提供)を受けて、グループワークによる話し合い活動(協働作業)につなげる。そしてフィードバック(講師による情報提供、受講者の確認)と言った流れを2～3回行なう。その中で受講生に「相互理解」「対等性」「協働」の大切さを気づかせ、講座内及び日常生活での「ふりかえり」により専門性を高めていくことを意識してもらった。講座内外の省察行為を促進させるために、「そだねーファイル」と名付けた「学習ファイル」を活用し、すべての講座で「意識醸成」の成果につながるよう努めた。

次に、講座1～5の概要とキーワード(相互理解、対等性、協働を含む)との関係を見ていく。

第1回 外国人と共に暮らす社会とは何か

キーワード：外国人居住者の背景、多文化共生社会、相互理解、協働

- ・地域を知る⇒北海道、胆振地域における外国人居住者の背景～登録者数(在留資格別、国籍別等)⇒そこから何が見えるか・・(外国人を知る～相互理解)
- ・「多文化共生に向けた活動」事例～技能実習生への支援(紋別市、函館市の事例)／日本

語学習教室(山形市、仙台市)・・・支援から協働的活動の事例

第2回 多文化コミュニケーションー相互理解に向けてー

キーワード：多文化コミュニケーション、相互理解、対等性

- ・多文化共生社会の一員であるために、「わたし」のコミュニケーションスタイルを知る
- ・自文化に気づく ⇒文化の概念、コミュニケーションの定義、コミュニケーションスタイルと文化、高コンテクスト文化・・・(クイズ、ゲームなどを通じ、自文化、自身のコミュニケーションスタイルへの気づき、相互理解、対等性の意識の必要性を認識。)

第3回 私たちのことばと地域(方言、アイヌ語を含む言語の多様性)

キーワード：日本語の特徴、地域のことばと文化、相互理解、対等性

- ・他文化・多文化との接触、共生にとって大切なこと～自言語、自文化を知る(方言を含め)～他言語・他文化にも目を向ける⇒外国人との相互理解、対等性
- ・日本語表現の特徴～「常識」がもつ危険性を認識
- ・共生社会における日本語の在り方⇒日本語内の多様性、外国人にもわかる日本語

第4回 外国人とのコミュニケーション

キーワード：やさしい日本語、学習リソース、対等性

- ・外国人とのコミュニケーションー何が難しいか、なぜ「やさしい日本語」が必要か。
⇒発話調整、やさしい日本語の実践練習～言語格差を埋める「対等性」への気づき
- ・日本語学習リソース(教材)をしてみる。⇒ことばの使用場面、どう相手に伝えるか教材を通して学ぶ。

第5回 多文化共生の地域づくりに向けて

キーワード：共生の定義、外国人との交流、学習支援者の活動、相互理解、対等性、協働

- ・外国人との共生の定義⇒相互理解、対等性、協働の重要性の確認
- ・日本人住民の意識の実態(アンケート等)、外国人との面談、交流から地域の課題を探る。
- ・地域の学習支援者、自治体等との連携可能な活動について話し合う。⇒フォローアップ講座での検討課題の準備

3. 教材の検討・開発

3.1 教材開発・検討委員会

教材開発・検討委員会は、第1回研修(室蘭市)開始前と終了後、第2回研修(伊達市)終了後の計3回、開催し、研修カリキュラムに沿った教材の開発、研修中の教材の使用と効果について検討を行った。

【日時】

第1回委員会 令和3年6月18日(金)16:30~18:00

第2回委員会 令和3年9月10日(金)16:30~18:00

第3回委員会 令和3年11月26日(金)16:30~18:00

【検討内容】

1. 室蘭市での研修前では、①地域の状況を知るための資料(歴史文化、教育、産業等)、②在住外国人の背景(在留資格、日本語能力、住民や地域社会との接触経験等の情報)、③外国人との共生のための地域の支援策、等の準備を行う。
2. 各会場の講座1~5に使用する「共通教材」の検討を行った。本研修の目標を「多文化共生社会に向けた市民の意識醸成」としたが、これを効果的に実現するために講座では省察活動を取り入れ、講座後にも次回までに気づいたことを記録する活動を行ってもらうことにした。そのための共通教材として、事前課題(予習シート)、講義(講師による情報提供)後グループワークで意見交換や確認ののち、「ふりかえり」(ふりかえりシート)、講座終了後は次回の講座までに日常での気づきの記録(復習シート)——これら3種のシートを基本的に(1回と5回のみ、一部変更)講座に共通する教材「そだねーファイル」として使用することにした。

3.2 共通教材「そだねーファイル」について

【「そだねーファイル」——表紙にある説明】

そだねーファイル この講座では市民のみなさんが外国人とともに暮らす社会について考え、「相互理解」「対等」「協働」について学びます。この「そだねーファイル」は受講者のみなさんが気付いたことを記録していくファイルです。各講座で思ったこと、感じたことなどを自由に書いてください。全5回の講座の最後で、みなさんの感想を共有する予定です。

(例)第1回講座「外国人と共に暮らす社会とは何か(室蘭会場)」

【ふりかえりシート】

1. どんな発見がありましたか。
2. 自分が思っていたことと、違ったことは何ですか。
3. 何かできそうな気になりましたか。

【復習シート】

1. 第1回目の講座の後、地域の状況について確認できたことや気づいたことを書いてください。

2. 身近な外国人には、どんな人がいるかこれまでの経験から思い浮かべてください。
3. 外国人がこの地域で生活するときどんな難しさがあると思いますか。また、日本人ならそれほど難しくなくても、彼らにとっては難しいことは何だと思いますか。

3.3 各講座の流れと教材の使用について

第1回「外国人とともに暮らす社会とは何か」

目 標： 胆振地域に住む外国人への理解を深める。

地域における外国人支援活動の事例から多文化共生を考える。

キーワード： 外国人居住者の背景、多文化共生社会、相互理解、協働

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:10 ～	研修概要、方法等説明 自己紹介 学習者の背景 ^{(*)1} 【在留資格、国籍等】 外国人就労者 監理団体・技能実習機構	講義 グループワーク クイズ、講義 動画視聴	フライヤー、そだねーファイルほか 配布資料、PPT 新聞記事 映像資料 ^{(*)2}
(II) 14:20 ～	(10分休憩後) 学習者への日本語支援 日本語教室事例	動画視聴 講義	映像資料 ^{(*)3} PPT
(III) 15:30 ～	(10分休憩後) 意見交換～発表 学習内容の確認	グループワーク 個人作業	ふりかえりシート ^{(*)4} 復習シート ^{(*)5} は次回までの課題

注1： 室蘭では、胆振地域全体と室蘭市在住の外国人の背景に関する情報、伊達市、苫小牧市においても同様に全体、個別の状況を理解してもらおう。

注2： 胆振地域を含む道内の技能実習生（ベトナム人を中心に）を紹介した映像。

注3： 北海道の事例（函館市、紋別市）——日本語教室紹介

注4： 第1回講座の「ふりかえりシート」、「復習シート」の内容は3.2(18頁)に記載。

注5： 「復習シート」は講座修了後、受講者に学んだ事柄の確認や新たな気づきや発見を記録し、次回の講座の際に提出してもらおう。

第2回「多文化コミュニケーション—相互理解に向けて—」

目 標： 多文化社会の一員であるために、「わたし」のコミュニケーションスタイルを知る。自文化に気づく。

キーワード： 多文化コミュニケーション^(*1)、相互理解、対等性

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:05 ～	準備(資料配布等) アイスブレイク(自己紹介 と自身の活動紹介) 文化とコミュニケーション	グループワーク 講義、クイズ	ワークシート(セールスポイント) PPT、配布資料
(II) 14:10 ～	ステレオタイプ 自文化中心主義 予習シート確認 初対面の外国人に質問	講義 講義 グループワーク (発表) クイズ、ゲーム・ ペア	PPT、配布資料 PPT、配布資料 予習シート ^(*2) PPT、配布資料
(III) 15:20 ～	(10分休憩後) ことばと文化コンテキスト 夫婦の会話事例から 聞くコミュニケーション 学習内容の確認	講義 クイズ ペア・ゲーム 個人作業	PPT、配布資料 PPT、配布資料 付箋 ふりかえりシート ^(*3) 復習シート ^(*4) は次回までの課題

注1： 講座では、ステレオタイプ、文化相対主義、多様性への寛容、高コンテキストについての理解をキーワードとして捉えている。

注2： 第2回予習シートでは、初対面の外国人にどのようなことを質問するか、複数記述することを求めている。

注3： 第2回ふりかえりシートでは、①「自身の価値観やコミュニケーションスタイルについての気づき、②多様な価値観の人々と相互理解するためには、どんなことが大切か、の2点を振り返ってもらっている。

注4： 第2回復習シートは、①地域の状況についての確認や気づき、②自身のステレオタイプや価値観についての気づき、③これからコミュニケーションするときに意識すること、の3点である。

第3回「私たちのことばと地域(方言、アイヌ語を含む言語の多様性)」

目 標:多様な言語・方言の存在と対等性を考える。／日本語を相対化して捉える。
／共生社会における日本語の在り方を考える。

キーワード:日本語の特徴、地域のことばと文化、相互理解^{(*)1}、対等性^{(*)2}

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:05～	準備(資料配布等) 予習課題の確認 日本語の位置づけ 方言とアイヌ語 第1講のまとめ	グループワーク 講義 (講師と受講者の対話を含む)	予習シート ^{(*)3} 講義資料(レジュメ)
(II) 14:15～	(10分休憩後) 日本語表現の特徴 聞き手責任言語 vs 話し手責任言語 曖昧表現とわかりやすい日本語 第2講のまとめ	講義、クイズ 講義、クイズ グループワーク 講義、クイズ	講義資料(レジュメ) 講義資料(レジュメ) 講義資料(レジュメ)
(III) 15:15～	(10分休憩後) 国際化と日本語の国際化 ～外国人による日本語、外国人のための日本語 (やさしい日本語) 質疑応答 学習内容の確認	講義、クイズ グループワーク 講師—受講者 個人作業	講義資料(レジュメ) ふりかえりシート ^{(*)4} 復習シート ^{(*)5} は次回までの課題

注1～注2:「相互理解」と「対等性」は第1講と第3講で強調したキーワードになっている。

注3:「予習課題」(予習シート)は、①「世界の中の日本語の位置づけ」(クイズ形式)、②「そだねー」は方言か、③「おぼんでした、こちらは～でした」と「夕」を使うか、に答えるもの。

注4:第3回ふりかえりシートでは、「講座の前と後で日本語に対する認識の変化、気づきについて」「言葉の多様性についての考え」を振り返ってもらっている。

注5:第3回復習シートには、「日常生活での確認、気づき」「相互理解にとって最も大事なことは何か」「日本語についてさらに学びたいこと」について書き留めてもらった。

第4回「外国人とのコミュニケーション」

- 目 標： ・外国人のための日本語学習ツールを見つめる。
外国人が何を学び、何が難しいかを考える。
・やさしい日本語について考える。／実際に外国人と話してみる。／やさしい日本語への書き換えを試みる。

キーワード： やさしい日本語^(※1)、学習リソース、対等性

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:05～	準備、講師紹介 日本語能力について 日本語学習ツール 予習課題の確認 日本語に対する外国人 の意見を聞く	講義、クイズ 動画視聴 グループワーク 動画視聴	PPT、配布資料 日本語学習サイト 予習シート ^(※2) 録画資料 ^(※3)
(II) 14:10～	(10分休憩後) 外国人と話してみる ふりかえり①	グループワーク 個人作業	ZOOMによるオンライン対談 感想をノートに記録
(III) 15:00～	(5分休憩後) やさしい日本語の特徴 やさしい日本語への書き 換え～発表 ふりかえり②(全体)	講義、クイズ グループワーク 個人作業	PPT、配布資料 配布資料(市のHPの一部をやさしい日本語に書き換える作業) ふりかえりシート ^(※4) 復習シート ^(※5) は次回までの課題

注1：「技術」の習得より「意識」を身に付けてもらうことが狙い。

注2：第4回予習シートは、「外国人にとって日本語の何が難しいと思うか」「外国人と話した経験の有無」～有る場合、気をつけた点、ない場合、気をつけるべき点を問うもの。

注3：国籍、在留資格の異なる在住外国人に対し、日本語や生活についてインタビューした動画を編集したもの。

注4：第4回ふりかえりシートは、「外国人とのコミュニケーションで大切なことは何か」「やさしい日本語で重要なことは何か」「新たに気づいた点」を振り返る内容になっている。

注5：第4回復習シートは、「日常生活での確認や気づき」「身の回りでやさしい日本語にした方がいいもの」「周囲の人とのやり取りで気を付けるようになったこと」について記述する。

第5回「多文化共生の地域づくりに向けて」

目 標:外国人との共生社会に向けて、相互理解と対等性を念頭に置いた協働的な活動の必要性を認識する。地域のリソースをうまく使い、具体的な活動を考える。

キーワード:共生の定義、外国人との交流、学習支援者の活動(*1)、相互理解、対等性、協働

時間配分	講座内容	活動形態	教材、資料
(I) 13:05～	準備(資料配布等) 予習課題の確認 多文化共生の理念 (①定義、②相互理解、 対等性とコミュニケーション志向からの共生観)	グループワーク 発表 講義	予習シート(*2) PPT、レジュメ
(II) 14:00～	(10分休憩後) 外国人居住者との意見 交換(*3) まとめ(小括)	グループワーク 発表 グループワーク 発表	(テーマ) 地域の多文化共生への課題、他地域との比較ほか意見交換、交流 個別ノート(意見内容まとめ、感想)
(III) 15:00～	(10分休憩後) 多文化共生実践地域の事例紹介 【討論】地域の課題、何が できるか、自治体との連携等】 ふりかえり	講義 グループワーク 発表 個人作業	PPT、レジュメ ふりかえりシート(*4)

注1: 近隣の市を含め、当該地域の学習支援者団体の最近の活動事例を紹介した。

注2: 第5回予習課題は、「多文化共生の定義」の捉え方を総務省報告書(2006年版)より確認しておくこと、共生に関する住4.1民アンケートへの回答による共生観の見方を知ること。

注3: 各地域に在住する留学生、国際交流員に参加してもらい、日本語や生活上の困難点、地域の課題等について質疑応答や意見交換を行った。

注4: 第5回ふりかえりシートは、「外国人居住者と話し気づきや新たな発見」「多文化共生の地域づくりの課題」「この地域に相応しい共生社会のための具体的活動」についてふりかえる内容。

* 各地域とも、研修の翌週に自治体関係者も参加してオンラインで「フォローアップ講座」を実施。

4. 研修の実施

4.1 室蘭市での研修について

- 1) 研修テーマ:「外国人と共に暮らす社会について考える」
- 2) 研修目的:地域社会の外国人との共生のために住民に何ができるか考えてもらう。
- 3) 受講対象者:外国人との交流や相互理解に興味のある方。
胆振管内在住で全5回に参加できる方。
- 4) 修了要件:全5回中4回以上の出席を要件とし、修了者には修了証を授与する。
- 5) 修了者:9名(受講者11名)
- 6) 研修内容(講座の教育内容、講師名等)

日程／講師	テーマ／教育内容
第1回(7/10) 湯山 英子 北海道大学研究員	「外国人とともに暮らす社会とは何か」 地域在留外国人の背景／道内外国人技能実習生の事例／学習支援状況
*第2回(7/31) 佐藤 公美 北斗文化学園教員	「外国人とのコミュニケーション」 外国人のための日本語学習ツール／やさしい日本語について考える
第3回(8/7) 菅 泰雄 元北海学園大教授	「私たちのことばと地域(北海道・胆振地方・室蘭)」 多様な言語・方言の存在、対等性／日本語の国際化と多文化共生
*第4回(8/21) 岡本 佐智子 北海道文教大教授	「多文化コミュニケーションー相互理解に向けてー」 相互理解をめざすコミュニケーションの在り方について考える／多様な価値観、コミュニケーションスタイルとの向き合い方
第5回(9/4) 中川 かず子 北斗文化学園教員	「多文化共生の地域づくりに向けて」 外国人とともに地域の課題を探る／地域における協働的活動を模索する

*第2回と第4回は講師の都合により順番が入れ替わっている。

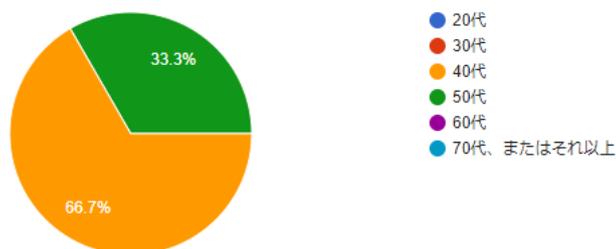
7) 研修の評価について

7)-1 研修終了後のアンケート調査結果

アンケート結果は以下の通りである。(全9名のうち、回答者9名)

1. 年齢層

右図の通り40代が約67%、50代が約33%である。



2. 職業

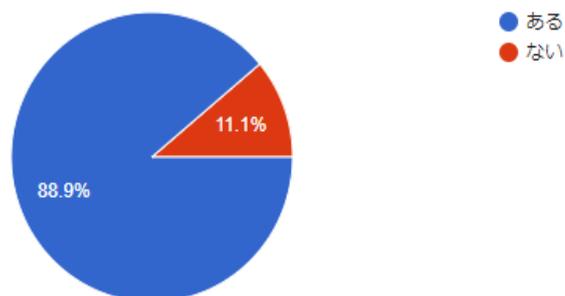
	人数	割合
市役所職員	3	33.3%
学生	2	22.2%
公務員	1	11.1%
家庭教師	1	11.1%
保育士	1	11.1%
個人事業主	1	11.1%

3. 今まで外国人との交流経験がありますか(国内で)。あれば、どのような交流か書いてください。

図の通り、「交流あり」は88.9%、「交流なし」は11.1%となった。

具体的な内容は以下に挙げる。

- ・同じ学校の留学生／・週2～3回おしゃべり、生活相談、観光、食事など／・職場の外国人が入院した時担当／・学生時代、寮生の半分以上が外国人とゲストハウスに住んでいた／・札幌のNPOに入っている／・セネガル出身の友人が実施するジャンベ(太鼓)のワークショップやイベントに参加／・役所の国際交流部門にいるため、ALTとの付き合いや海外からの来客への対応、窓口対応など／・職場の保護者と日常的な話をした／・子どもの頃ホームステイを受け入れた。
- 医学(大)の留学生センターで働いていた／・職場の同僚に外国人(中国、ロシア、コロンビア等)が多かった。

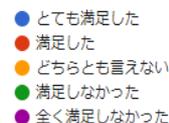
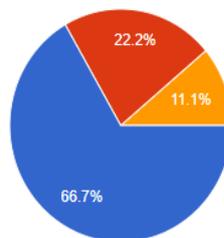


4. 講座を受講しようと思った理由は何ですか。

- ・多文化共生について基本に立ち返って理解を深めるため／・日本語教育に興味があった／
- ・身近に住んでいる外国人のことが気になったから／・日本語教育に興味があったことと、日本に住む外国人の暮らし向き等に興味があったから／・コロナで国際交流業務が滞ってしまい、何もできないいたので、この先に必要になる知識や気づきを得られるのではないかと考えた／・日本に住んでいる外国人の事情が知りたかった／・担任の先生に勧められたから。

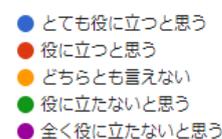
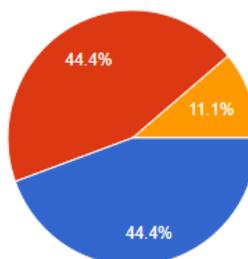
5. 今回の講座(全5回)はどうでしたか。

「とても満足した」が 66.7%、「満足した」が 22.2%、「どちらとも言えない」が 11.1%となった。概ね満足してもらえたようだが、1名だけ積極的な回答を避けている。



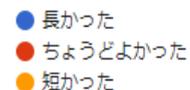
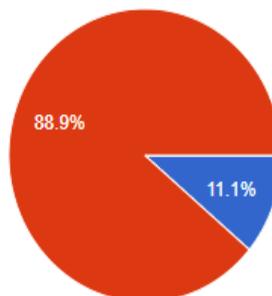
6. 講座で学んだことは今後役に立つと思いますか。

「とても役に立つと思う」「役に立つと思う」が合わせて 88.8%、「どちらとも言えない」が 11.1%となった。受講者の多くが肯定的な回答を示しており、今後具体的な活動につながっていくことが期待される。



7. 講座の期間は どうでしたか。(7月10日～9月4日までの全5回)

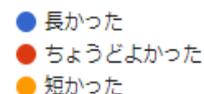
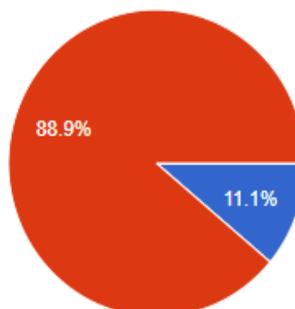
「ちょうどよかった」が多数であった。「長かった」と感じた人も1名いた。



8. 講座の時間は どうでしたか。

(13:00-16:00)

7の回答と同じ傾向が見られた。



9. 講座全体を通して、外国人との交流について気持ちや考え方に変化があれば書いてください。

- 色々な国の方との交流に興味をもつようになった。
- 今まで気づかなかったこと(コミュニケーションの仕方や先入観など)を認識したので、外国人との交流に気持ちの余裕ができた。
- 自分でも気づかない思い込みや押し付けがあったように思う。
- 留学生は大変な中(収入面で)、生活していると再認識した。
- コロナが落ち着いて制限が解かれたら、これまでの部署の事業の姿勢を少しずつ改善していきたいと思った。
- 大人向けの事業を子供や生徒向けに将来ベースを作るなどにシフト。
- どうしても身構えてしまうところもあったが、今回講座を通して学ぶことがたくさんあり、実際に留学生達とお話できたことで意識が変わった。
- 話の聞き方に今後変化があると思う。
- もっと相手に関心を寄せて関わりたいと思った。

10. 講座を通して良かったと思うことがあれば、書いてください。

- 外国人に対する接し方(態度や言葉遣い)について知ることができた。
- 生の(外国人)市民の声が聞けたこと。
- 同じようなことに興味のある人に会えてよかったと思う。なんとなくわかった気持ちになっていたことを改めて学べてよかった。
- タイさん(留学生)から話が聞けたこと。
- 様々な視点から日本語、日本人と外国人について学べた。外国人に接する機会があり楽しかった。日本語教育の奥深さを感じた。
- 毎日の業務の中では気づかなかったことを知ることができた。「やさしい」日本語は役立ちそうだ。
- 外国の方が日本で生活する中で困っていることや、言葉について理解できた。
- 様々な方面から専門家のお話を聞いてたくさん気づきがあった。
- 日本に住んでいる外国の方への認識が変わった。

11. もっと「学びたい」「知りたい」と思ったことがあれば、書いてください。

- 日本語(方言)など。
- 自分の中にあるステレオタイプに気づきたい。気を付けられるようにしたい。
- 多くの人がこういった学びの機会があればいいと感じた。
- 「やさしい日本語」の言いかえ術
- 情報共有の場や行政(室蘭)の取り組み
- 外国人に限らず、他者とのコミュニケーションにとって勉強になることばかりだったので、介護クラスの皆で受けたいと思った。グループワークに外国人が入るのはとても良かった。
- 外国の方々ともっと交流ができる場があればと思う。誤解してしまったり、こうだと思って決めつけ

ていることがあるかもしれないので、もっと相手を知る機会があればと思う。

7)-2 受講生による「ふりかえり」及び「復習」シートの概要 【全体の内容は「巻末資料」に掲載】

第1回講座：「職場で働く外国人の立場に立ち、これからもフォローしていく」「ベトナム文化をもっと知りたい」「彼らと一緒にベトナムにも行ってみたい」「外国人との交流の場を探してみる」など、受講者自身の行動を示唆するもののほか、外国人がこの地域で生活するときの難しさ(役所等の手続き、災害時の避難、日本語、文化や習慣等)が挙げられた。

第2回講座：「相手の立場になって話したり聞いたりする必要性を感じた」「外国人が困っていることがわかった」「自治体(の情報提供の発信法)に差がある」「相手に伝わるように意識して対応する」「日本人と外国人の知識、文化背景等の違いを意識した文書作成が必要だ」「相手のことをもっと知りたい気持ちが強くなった」等の気づきや意見が示された。

第3回講座：「日本語の多様性」「話者の立場を意識する姿勢、共感的態度が重要」「話者の出身、地方を知ることが相互理解の一助となる」「外国人が感じる日本語の特徴を知りたい」「(講座後)動詞の使い方を注意深く聞き、相手の気持ちを判断するようになった」等、日本語の捉え方の変化、相互理解を前提とする言葉の使用についてのコメントが見られた。

第4回講座：「相手を理解しようとする行動と気持が必要だ」(以前は相手のことを決めつけがち)「コミュニケーションが苦手だが、判断留保も可能だ」「多様性を受容し、認め合うことが大事」「まずは相手に興味を持ち、よく聞くことで共感できることもある。ゼロからプラスにするコミュニケーションを意識する」等、コミュニケーションの在り方を再認識したという人が多かった。

第5回講座：「想像以上に生活が大変だとわかった」ほか、「日本人の間接的な話し方がわかりにくい」「日本語学校以外の日本語を学ぶ機会が少ない」「交通が不便」等、留学生が日本社会で生活する上での課題を再認識した。役所、行政の情報発信、地域での交流活動を増やす(活動助成を行なう)ことで相互理解、対等性の意識を高めるべきとの意見が多く示された。

7)-3 講師によるふりかえり、次回への課題など

第1回講座：在留外国人の背景に関心を示す人が多かった。伊達市では外国人構成員の状況を見て講座内容に反映させたい。

第2回講座：受講生の意識に変化が生じたと感じられたが、「対等性」の意識をより深められたらよかった。教材紹介等の時間配分を再検討する。

第3回講座：クイズ形式の時間を増やし、質問を促す工夫と質問への回答を受講者と共有する機会を設けたい。方言への関心が高く、表現の多様性につなげたい。

第4回講座：多様な価値観をもつ他者との相互理解に向けて、何らかの気づきを得られた。受講者の緊張感緩和のため、次回は講座開始時にアイスブレイキングを行なう。

第5回講座：意識の高い受講者もいたので、次回は他地域の事例との比較により当該地域の課題を探る。次回も外国人居住者との話し合いの場を設定したい。

4.2 伊達市での研修について

- 1) 研修テーマ:「外国人と共に暮らす社会について考える」
- 2) 研修目的:地域社会の外国人との共生のために住民に何ができるか考えてもらう。
- 3) 受講対象者:外国人との交流や相互理解に興味のある方。
胆振管内在住で全5回に参加できる方。
- 4) 修了要件:全5回中4回以上の出席を要件とし、修了者には修了証を授与する。
- 5) 修了者:7名(受講者8名)
- 6) 研修内容(講座の教育内容、講師名等)

○研修内容/時間:内容は以下の通り/時間は各講座とも 13:00~16:00

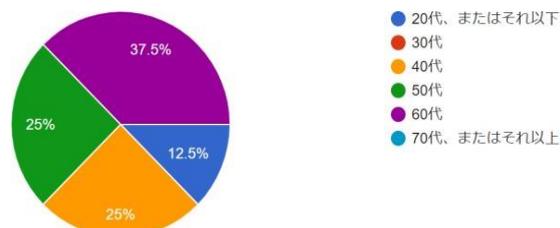
日程/講師	テーマ/教育内容
第1回(9/25) 湯山 英子	「外国人とともに暮らす社会とは何か」 地域在留外国人の背景/道内外国人技能実習生の事例/学習支援状況
第2回(10/9) 岡本 佐智子	「多文化コミュニケーション—相互理解に向けて—」 相互理解をめざすコミュニケーションの在り方について考える
第3回(10/23) 菅 泰雄	「私たちのことばと地域(北海道・胆振地方・伊達)」 多様な言語・方言の存在、対等性/日本語の国際化と多文化共生を考える
第4回(11/6) 佐藤 公美	「外国人とのコミュニケーション」 「やさしい日本語」の必要性/やさしい日本語を実際に使用してみる
第5回(11/20) 中川 かず子	「多文化共生の地域づくりに向けて」 外国人とともに地域の課題を探る/自治体と連携した活動を考える

7) 研修評価について

7)-1 研修終了後のアンケート調査結果

期間	2021年9月25日~2021年11月20日
時間	全5回 1回3時間(13:00~16:00)
受講者数	8
修了者数	7(修了率:87.5%)
事後アンケート回答数	5(回答率:62.5%)

1. 年齢層

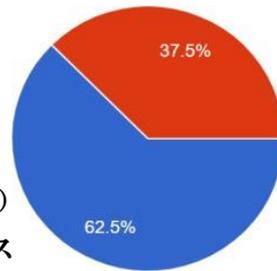


2. 職業

	人数	割合
会社員	4	50.0%
市議会議員	2	25.0%
市役所職員	1	12.5%
無職	1	12.5%

3. 今まで外国人との交流経験がありますか(日本国内)。どのような交流か書いてください。

- 友人として一般的な会話
- スキーレッスン、観光ガイド(少し)
- 会議、飲食を伴う交流会など
- 総合商社後(サウジアラビア、デトロイトでの駐在)
外国企業 3 社に約 30 年居た為、日本のオフィス
や、北米、欧州、東南アジア、中国と様々な人間とのビジネス及び個人での交流
- 交流パーティなど



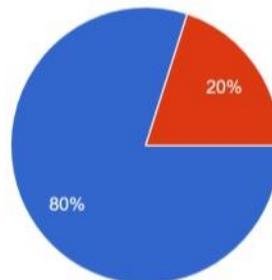
● ある
● ない

4. 講座を受講しようと思った理由は何ですか。

- 外国人が増えているのに、何も接点がなかった。何かできることはないかと思って参加した。
- 多文化共生に興味があった。
- 外国人の技能実習生や特定技能等の方を招き入れる監理団体として、学ぶべきことが多いと感じ受講しました。
- 此れ迄 Minority での立場が多かった経験から、逆の立場で対応する環境が今後増えていく中でどのように学問的に学び、実践していくかを知りたいと考えて。
- 多文化というよりもアイヌ文化や縄文時代の書物を読み、他の国も文化に興味がありました。

5. 今回の講座はどうでしたか。

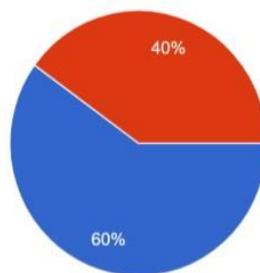
「とても満足した」が 80%、「満足した」が 20%となった。



● とても満足した
● 満足した
● どちらとも言えない
● 満足しなかった
● 全く満足しなかった

6. 講座で学んだことは今後役に立つと思いますか。

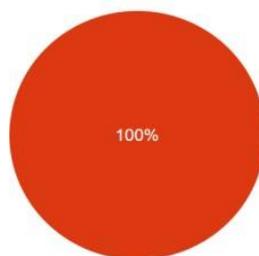
「とても役に立つと思う」が60%、「役に立つと思う」が40%と、概して肯定的な回答と受け止められる。



- とても役に立つと思う
- 役に立つと思う
- どちらとも言えない
- 役に立たないと思う
- 全く役に立たないと思う

7. 講座の期間はどうか。

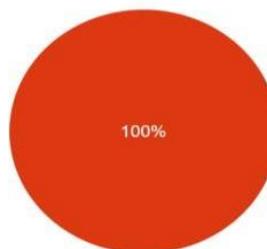
(9月25日～11月20日全5回)



- 長かった
- ちょうどよかった
- 短かった

8. 講座の時間はどうか。

(13:00～16:00)



- 長かった
- ちょうどよかった
- 短かった

9. 講座を受講して良かったと思うことがあれば、書いてください。

- ・自分が今何をすべきかについて考えさせられたことがとてもよかったです。
- ・実践的でとても勉強になりました。
- ・外国と日本の文化の違いや現状を知る事が出来、また、実際に外国人と交流出来た事についても、とても有意義でした。
- ・実際の外国人との接点の場が作られていた点、彼ら彼女らが住んでいる社会的環境がある程度理解出来たのと、今後行政、我々市民が取り組んでいかなければいけない課題も浮き彫りになった事。
- ・ベトナムの方がかなりの就労ということをまったく知らず、働く環境が変わりつつあることがわかりました。

10. 全5回の講座を通して、外国人に対する考え方や意識に変化があれば書いてください。

- ・特にベトナムの留学生の話がきけたことはとても参考になった。困っていることがたくさんあるのに、外国人自身が自分で解決するしか道がないことを知って、何が出来るかを考えるきっかけになった。
- ・もっと交流して、相互理解を深めたいと思いました。

- ・変化というわけでは無いですが、やはり夢や希望を持って来日される外国の方について、寛容な心で受入れるという事を改めて認識しました。
- ・外国人だけでなく、道内外の同じ日本人でも同じような環境にある点も理解する必要がある。
- ・元々我々もどこかに行けば、外国人だと思います。これからも普通に接していきたいです。

11. 伊達(胆振)で多文化共生において何が重要だと思いますか。

- ・まずはすでに来られている外国人技能実習生の実態を知ることと、可能なら市民との交流が持てることが重要。
- ・情報共有、交流できる場所、機会。
- ・自分も含めてですが、もっと多文化を知る機会が必要であると感じました。
- ・即ちよそ者の概念が深く残っている場所なので、同じ日本人(移住者含め)同士でも分かりあえる寛容な心と柔軟性、新しいモノ、事に興味を持つ、更に自らが置かれている状況の認識を持つこと。
- ・もっと気軽に交流できる場所が必要かと思いました。野菜の産地なので、食を通じた交流が行えるとどちらにも楽しいものになるのではと、思いました。

12. 多文化共生社会に向けて自分に何ができると思いますか。

- ・行政、民間で外国人が参加できて、日本人と交流する機会をつくること。
- ・交流できるイベントを企画したいと思います。
- ・地域の方と外国人の方を繋ぐお手伝い等が有れば、積極的に参加したいと思います。
- ・必要であれば外国人との交流に役立つような事を行政とも協力しながら進めて行きたい。
- ・何かできますかと問いかけると、逃げられてしまう国民性を理解しつつ、多文化というくくりではなく交流とか〇〇を知ろうというハードルが低いお誘いを通じて、楽しいという感想が得られれば共生は根付くと思います。どんなちいさなことで成果なので、ちいさな取り組みを起こしやすい環境がまず必要だと思います。大人への取り組みも大切ですが、学生が、多文化をもっと知ることも大切だと思います。

13. 多文化共生についてもっと「学びたい」「知りたい」ことがあれば、書いてください。

- ・好奇心を持てば多文化という視点は際限なく色々なことがあるが、人手不足が地域の生産力を下げ、地域が消滅してしまうのではないかという時代に外国人との共生に活路を見出すためにも、お互いが幸せになれる方法を模索することが大事だと思った。そのために何が足りないのか、多くの人の理解につなげるにはどうしたらいいのかなど、民間の取り組みを含めた他市の事例などを知りたいと思った。
- ・多くの外国人と話したいと思いました。
- ・コミュニケーションの取り方は、まだまだ学びたいと思いました。
- ・留学生、技能実習生と実際彼ら彼女らが困っている事、何をしたい、して欲しいことなどを話し合える場の提供。彼ら彼女らの出身地に就いての話を出身地の簡単な料理、お菓子等を食べながら

の場合であれば、お互いの理解が深まるので。特に技能実習生の実態をもっとくわしく知りたい。

7)-2 受講生による「ふりかえり」及び「復習」シートの概要 【全体の内容は[巻末資料]に掲載】

第1回講座：「地域に外国人就労者、特にベトナム人技能実習生が多いことに驚いた」というコメントが多かった。外国人が地域に溶け込む課題(言葉、買い物、生活習慣、病気、地域からの孤立等)を挙げ、解決に向けた対応に関心を示したり、外国人と日本人が交流し、地域の活性化につながる好事例等、具体的な提案も見られた。

第2回講座：受講生自身の価値観、コミュニケーションスタイル(多様な価値観や文化の存在、先入観やステレオタイプ、高文脈コミュニケーション等)への気づき、また、相互理解のために、「物事の価値観に囚われない柔軟な対応」「相手を尊重し、互いに理解し合うまで話し合う」重要性を改めて認識するコメント等があった。

第3回講座：日本語について、「多様性を認識した」「多文化共生には日本語の理解が大事」「方言の無意識な使用」「イントネーション、文体の違い等による意味変化」「日常的な誤用」等の気づきが示された。また、言葉の多様性と他者(外国人を含め)とのコミュニケーションの関連性も再認識された。

第4回講座：外国人とのコミュニケーションには、「相手の立場に寄り添う」「相手の伝えたいことを理解する努力」「同じ目線(対等な立場で)話す」「相手のレベルに合わせる」等、相手への理解(立場、言語レベル等)を踏まえて、伝えるための工夫(わかりやすく、短く、明確に、等)を考えることが必要だということの認識が示された。

第5回講座：直接外国人居住者の生活上の困難さ(例：公共交通が不便だ、日本人との交流が少ない、相談する人が身近にいない、等)を確認し、受講者達は共生社会に向けた課題を実感したという。身近なところで、食イベント、食文化交流やキャンプや行ったつもり旅行等、実現可能な交流の機会をつくることが大事だという認識が示された。

7)-3 講師によるふりかえり、次回への課題など

第1回講座：在住外国人構成員への関心が高かったので、次回講座(苫小牧)に向けても情報を入手し、受講者にも共有したい。意見や質問が多かった。

第2回講座：市民活動への参加意欲も高く、異文化接触におけるコミュニケーションの気づきや意識化は促進できたと思われる。

第3回講座：多様な言語、方言の一つとして、日本語、北海道方言があり、日本語の多様性を再認識し、言語を相対化した視点で捉えられるよう進めた。

第4回講座：外国人の日本語能力の説明、2回目、3回目の講座内容を踏まえた実践的な活動を取り入れたことにより、よい流れが作れ、雰囲気もよかった。

第5回講座：受講者の能動的、自立的な参加姿勢がうかがえた。地域特有の状況の一層の理解のために、居住外国人と地域のニーズを講座に反映させたい。

4.3 苫小牧市での研修について

- 1) 研修テーマ:「外国人と共に暮らす社会について考える」
- 2) 研修目的:地域社会の外国人との共生のために住民に何ができるか考えてもらう。
- 3) 受講対象者:外国人との交流や相互理解に興味のある方。
胆振管内在住で全5回に参加できる方。
- 4) 修了要件:全5回中4回以上の出席を要件とし、修了者には修了証を授与する。
- 5) 修了者:14名(受講者15名中)*対面(初めの2回)、オンライン(3回)
- 6) 研修内容/時間:研修内容は以下の通り/時間:土曜日隔週 13:00~16:00

日程/講師	テーマ/教育内容
第一回(12/18) 湯山 英子	「外国人とともに暮らす社会とは何か」 地域在留外国人の背景/道内外国人技能実習生の事例/学習支援状況
第二回(1/8) 岡本 佐智子	「多文化コミュニケーションー相互理解に向けてー」 相互理解をめざすコミュニケーションの在り方について考える
第三回(1/22) 菅 泰雄	「私たちのことばと地域(北海道・胆振地方・室蘭)」 多様な言語・方言の存在、対等性/日本語の国際化と多文化共生
第四回(2/5) 佐藤 公美	外国人とのコミュニケーション」 外国人のための日本語学習ツール/やさしい日本語について考える
第五回(2/19) 中川 かず子	「多文化共生の地域づくりに向けて」 外国人とともに地域の課題を探る/地域における協働的活動を模索する

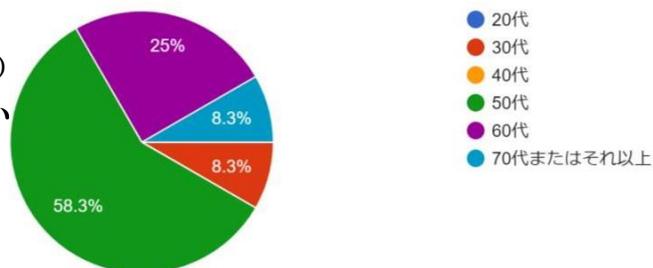
7) 研修評価について

7)-1 研修終了後のアンケート調査結果

期間	21年12月18日~22年2月19日(苫小牧)
時間	全5回 1回3時間(13:00~16:00)
受講者数	15
修了者数	14(修了率:93%)
アンケート回答数	12(回答率:86%)

1. 年齢層

右図の通り、50代(58.3%)、60代(25%)
ほか、30代と70代が8.3%ずつとなっている。



2. 職業

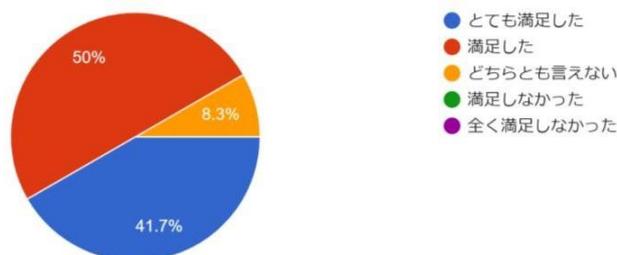
	人数	割合
会社員	2	20.00%
専業主婦	2	20.00%
介護施設職員	1	10.00%
介護支援専門員	1	10.00%
団体職員	1	10.00%
自営業	1	10.00%
教員	1	10.00%
無し	1	10.00%

3. 本講座を受講しようと思った理由を教えてください。

- ・これから外国人とのコミュニティの形成に向けヒントになることが有ればと思い受講しました。
- ・外国人雇用施設としての役割を把握するため
- ・外国人の方が困っていたら、力になってあげたいです。その様な事の学びなのかと思いました。
- ・40年程前、海外に留学した際、地元のボランティアの方達にお世話になり、有意義に過ごすことができました。今回は外国人との共生の講座で自分がどなたかの力になればと思い受講致しました。
- ・これからの時代介護の世界では外国人との関係が大事だと思い本講座に興味を持ちました。
- ・実際の状況を知りたいと思いました。
- ・講座内容に関心があったから
- ・外国人の増加に伴い、将来の生活への影響と自分にできることを模索するため
- ・日本語教師の資格を取得、日本語教室で働きたいと思っているので、苫小牧の現状や多文化共生について理解を深めたいと思ったからです。
- ・国際交流サロンやぐるーりワールドなどへの参加、ホームステイの受け入れ等これまでも外国人との交流を積極的に関わってきました。コロナ禍で最近では実践できていないため、今できることがあったらと思い参加しました。
- ・福祉業界の人材不足は課題。外国人に頼らなければならない時代と考えたから。
- ・過去の経験から役立てることがあるのかどうかの確認のため

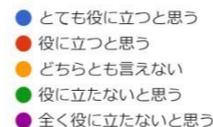
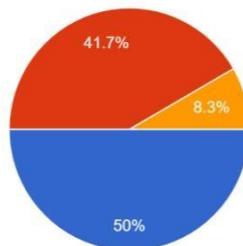
4. 今回の講座(全5回)はどうでしたか。

「満足した」(50%)、「とても満足した」(41.7%)で、概ね満足したという結果であった。

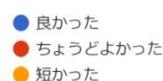
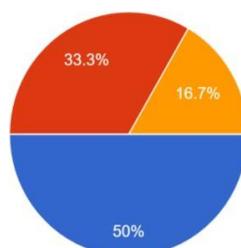


5. 講座で学んだことは、今後役に立つと思いますか。

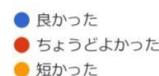
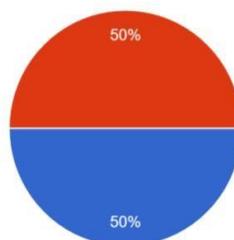
「とても役に立つと思う」(50%)、
 「役に立つと思う」(41.7%)、
 「どちらとも言えない」(8.3%)
 という結果となった。



6. 講座の期間はどうか。(21年12月18日～22年2月19日まで全5回)



7. 講座の時間はどうか。(13:00～16:00)



8. 講座を受講して良かったと思うことがあれば、書いてください。

- ・ 苫小牧の外国人の居住人数等を知ることが出来た点
- ・ コロナ過の影響で全講座の受講はかありませんでしたが、資料を拝見し今後の外国人との関わりを学ぶことが出来ました。
- ・ 多文化の現状を知る事ができたことです。
- ・ 多文化共生社会に向けて、何かしたいと思っている人達に、出会えて良かったです。
- ・ 同じような志をもっている人がたくさんいることを知ることができました。この先も繋がることできたら嬉しいです。また、専門の先生方のお話が聴けたことは貴重で有意義でした。外国の方と顔を見ながら交流できたことも楽しい時間でした。ありがとうございました。
- ・ 先生の知識と全体のインタラクティブな進め方
- ・ 今まで外国人への理解が全くなかったと感じました。これから、少しずつではありますが地域コミュニティの形成について取り組んでいきたいです。
- ・ 講師の方達の御専門にふれることができ、新しいものの見方を知ることができ良かったです。
- ・ 日本語の難しさを再認識。わかるようにやさしい日本語を使う大切さを理解した。

- ・知らないことがたくさんあり、これからの外国人への関わりかたが変わります。
- ・今、このような学びの場を多数設けて活動に繋げていこうという試みをしているということを知ることが出来ました。

9. もっと「学びたい」「知りたい」と思ったことがあれば、書いてください。

- ・どのような法律・規定があるのか、それに対して北海道はどう対応しているのか、知りたいです。
- ・もっと日本語教育について学びたいです。苫小牧で日本語教育を推進して行くためには、どのような働きかけをして行けば良いのか知りたいです。
- ・私たちにできることなどを実際に話し合い、実行に移せるような、話し合いだけで終わらずに、行動に結びつける、そこまで進めるとしたらうれしいし楽しいと思います。
- ・異文化のコミュニケーション術など
- ・エスノセントリズムは興味深く、更には、共生という観点での世界の情勢についても、もっと学ぼうと思いました。
- ・地域での外国人への関わりについてもっと知りたくなりました。

7)-2 受講生による「ふりかえり」及び「復習」シートの概要 【全体の内容は[巻末資料]に掲載】

第1回講座:「地域に技能実習生をはじめ、外国人居住者数も多いことに驚いた」「外国人就労者の実態をもっと知りたい」という居住外国人の存在への気づき、さらに、「外国人が地域に溶け込む課題(言葉、買い物、生活習慣、病気、交通手段、地域コミュニティの情報収集、災害時)への対応、支援の必要性を認識したことが挙げられた。

第2回講座:「自分の価値観を相手に押し付ける」「自分は高コンテキストで曖昧に話していたが、相手には低コンテキスト的な話し方を求めた」、「職場では日本的に曖昧な言い方をしていた」等、自身のコミュニケーションスタイルを省察し、「相手のことを考えるべき」「相互理解が大事だ」等、相互理解の重要性に改めて気づいたというコメントが多かった。

第3回講座:「同じ北海道でも方言の違いもある。寛容さを持ちつつ、積極的にコミュニケーションを図る姿勢が大事」「時代により言葉遣いが異なる。高齢層、若年層では伝わらないことがある。外国人との共生においても気を遣うべき」ほか、言葉の多様性への気づきがあった。また、日本語教育や外国人による日本文典など、外国語からの視点への関心も見られた。

第4回講座:「『やさしい日本語』は曖昧な部分を取り去り、わかりやすく言い換え、伝えたいことを明確に」「難しい言葉の言い換えは相手に配慮しわかりやすく」「和製英語に注意」「アクセシビリティ、タスクフォース等のカタカナはやさしい日本語で」等、相手の理解への配慮、また、官公庁の広報、生活情報、災害時の対応の案内等のやさしい日本語化の必要性が挙げられた。

第5回講座:外国人からの提言を受けて、共生社会に向けて、外国人を特別視しない、コミュニケーション、交流イベントの場を積極的に作る、技能実習生には地域コミュニティ、企業等を通じて交流を働きかけてはどうかといった意見が出た。具体的には、食、音楽のほか、苫小牧らしいイベントを、企業や町内会とも連携して実施すること等が提案された。

7)-3 講師によるふりかえり、次回への課題など

第1回講座：これまで外国人との接点のある方が多く、関心の高さがうかがえた。問題提起に関しても、積極的に取り組んでくれた。

第2回講座：参加者は知識吸収意欲が高く、集中していた。自己のコミュニケーションスタイルの意識化、他者との相互理解のための気づきは促進できた。

第3回講座：日本語、方言の多様性を認識し、言語を相対化した視点で捉えることを意識した。リモート形式に不慣れなため気軽に質問を受けられなかった。

第4回講座：関係する講座と連携し、やさしい日本語への意識が高まった。外国人と話す時間を長くし、教材は事前に見てもらおうとよいと思った。

第5回講座：ブレイクアウトルームで討論を3回行ない、受講者は徐々に積極的に発言していった。特に、外国人とのセッションでは活発な議論が見られた。

4.4 フォローアップ講座について（室蘭・伊達・苫小牧）

1) 室蘭でのフォローアップ講座

日 時：令和3年9月11日(土)13:00～14:00 オンライン開催

参加者：受講生6名（市役所国際課職員1名を含む）北斗文化学園から2名

検討内容：（各地域共通）この地域に相応しい具体的な活動を考える。

・私たちに何ができるか考える。自治体とどのように連携できるか話し合う。

意見など：中学校で「国際理解講座」（登別市役所職員）開設の経験から、今後もやってみたい。すべての子供に機会を与えたい／オンラインで外国人と話せるプラットフォームづくり／世界の料理教室など食文化イベント／活動中の「日本語サロン」への協力／観光協会の広報活動に協力／継続的な活動になれば、市教育委員会も支援の可能性（市教委職員）／コロナ禍で活動がやりにくいが、緊急性や上からの指示があれば動きやすい（市職員）

今後の予定：「そだねー会」として非定期に会合をもち、活動につなげていく。市職員、市教委職員、登別職員ほか、日頃から意識の高い方々もいることから、情報を共有しながら活動の輪を広げていく。近隣地域の学習支援者ともオンラインで情報交換したい。

2) 伊達でのフォローアップ講座

日 時：令和3年11月27日(土) 13:00～14:00 オンライン開催

参加者：受講者5名、市役所企画財政部長、北斗文化学園から2名

検討内容：（各地域共通）この地域に相応しい具体的な活動を考える。

・私たちに何ができるか考える。自治体とどのように連携できるか話し合う。

意見など：技能実習生の受け入れ団体、実習生数の把握など正確な数字を知りたい（市役所ではあまり把握できていない）／週1回、月1回でも市民との交流

を行なう(草刈りなども可)／漁業関係者と話し合い、今後、関係者に情報提供していく／受講修了者のリーダーを中心に、情報を収集、活動につなげる。

今後の予定:市民活動家の F 氏(リーダー)や市会議員の K 氏を中心に、修了者グループの有志が外国人との交流の企画を考え、実行に移していく。実際、2月4日(金)に伊達市市民活動センターにて「多文化共生社会に向けた外国人技能実習生との交流準備会」を企画、準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染者の増加を受け、延期となった。

3) 苫小牧でのフォローアップ講座

日 時: 令和4年2月26日(土) 13:00~14:00 オンライン開催

参加者: 受講者7名、市総合政策部国際交流担当主幹、北斗文化学園から2名

検討内容:(各地域共通) この地域に相応しい具体的な活動を考える。

・私たちに何ができるか考える。自治体とどのように連携できるか話し合う。

意見など:【市への質問】現在、(外国人支援に対する)市役所の取り組みについて／年少者への日本語教育はどうなっているか／市在住の外国人のニーズを知るためにアンケート調査等を実施しているか／技能実習について市で把握しているか／【市からの回答】国際交流関係では、姉妹交流、ホームステイ事業が中心で、在住外国人数はまだ多くないという意識だった。外国人のニーズを調べるアンケートは試行したが、不十分だった。年少者への日本語教育は教育委員会の管轄であるが、議会で議論する方向で支援していきたい。苫小牧では外国人来訪者を増やしたい。企業の方で外国人を雇用したいのか、意向を把握したい。／【意見】イベントを継続(コロナ禍で中断)し、学習支援者の発掘を。オンラインサロンを開始してはどうか／日本語のできる外国人の活用を期待する。

今後の予定:市では広報関係で「やさしい日本語」に変換する企画を進めるので、受講修了者にも協力を呼び掛けた。今後、市役所とも連携してイベントの企画、情報の共有を行なっていく。北斗文化学園も協力し、コーディネータを発掘し、自治体と市民との連携による活動を推進していく。

5. 研修・事業評価

5.1 研修評価検討委員会による評価、意見・コメント等

5.1.1 第1回 研修評価委検討委員会—室蘭市における研修評価

室蘭市の研修【7月10日(土)~9月4日(土)】の終了を受け、研修評価検討委員会が開催され、以下の点について報告と審議がなされた。

- 1) 研修報告【研修目的、研修内容、研修カリキュラム、教材、受講者数・修了者数】
- 2) 審議事項:研修評価【資料:①アンケート結果、②受講生の「ふりかえり」内容、③講師の「ふりかえり」】、質問、コメント

①と②については、「4.1 室蘭市での研修」の節を参照されたい。ここでは、委員会による「総括」と「意見、特記事項」について記す。

【総括】

全体的に見て、受講者は各講座の「ふりかえり」で単なる気づきや発見以上に強い関心を抱き、行動に移そうとする積極的な意思を示すものもあり、「相互理解」を深めるため、あるいは「対等性を意識する」行動を起こす姿勢が感じられた。講座を追うごとに意識の変化が強くみられ、研修の目的とした「意識の醸成」については成果があったと評価できる。課題として、意識の醸成を次のステップにつなげられるよう人材育成の在り方を考えること、持続可能な活動を行なえるよう自治体との連携を図ることが挙げられる。

【委員からの意見、特記事項】

講座の成果として、講師も務めた委員 2 名から、「意識化のために段階を踏んだ進め方はよかった。受講生の意識の深まりは確認できた。」「講座では、相互理解、対等性についての気づきが確認され、全体的に意識の醸成という目的は達成できたと思う。」といった意見が出された。初めての室蘭での研修からリーダーが育成され、そこからさらに人材の広がり期待できるという声も上がった。さらに、胆振総合振興局総合政策課課長から、「外国人との共生に向けた地域づくりの必要性を感じた。」「交流機会、イベント等の取り組みについては『地域づくり総合交付金』が活用できる」等、役所の活用を促すコメントも出された。

5.1.2 第 2 回研修評価検討委員会――伊達市における研修評価

伊達市の研修【9月25日(土)～11月20日(土)】の終了を受け、研修評価検討委員会が開催され、以下の点について報告と審議がなされた。

- 1) 研修報告【研修目的、研修内容、研修カリキュラム、教材、受講者数・修了者数】
- 2) 審議事項:研修評価【資料:①アンケート結果、②受講生の「ふりかえり」内容、③講師の「ふりかえり」】、質問、コメント

以下に、委員会による「総括」と「意見、特記事項」について記す。

【総括】

今回の受講者の中には、実際に市民活動を実践している人達もおり、居住外国人の状況には詳しくなかったものの、社会の中に変化が生まれていることへの気づきは感じられた。講座の内容に溶け込み、意識レベルでは多文化共生社会に向けての動機づけを高め、今

後は日本語学習支援者としての活動を実践できる人達が複数出てきそうな期待感ももてた。委員会でも「学習支援者に望まれる資質・態度の「態度」の部分ですでに有している方々が集まったようだ」というコメントも出ていた。課題については、【委員からの意見・特記事項】に記す。

【委員からの意見・特記事項】

まず、胆振総合振興局地域政策課主査(課長代理)から、多文化共生における重要な意識である「相互理解」「対等性」「協働」を軸にした講座の開催を歓迎するとして、交流の場を設ける際に補助金の申請を勧める提案がなされた。委員からは評価できる点として、「日本語学習者の背景(文化、言語、コミュニケーションスタイル、考え方等)が多様であることへの気づきに関して、この講座は大いに貢献した」「伊達の受講生は積極的で、学習支援者としての資質もすでに持ち合わせた人が多かったこともあり、意識化という目的は達成された」ことが挙げられた。その上で、「リーダーシップをとれる人達に対し、今後外国人と日本人を繋ぐ役割をどう担ってもらえるか」という課題も残る。この点はフォローアップ講座で具体的な活動も示唆され、引き続き、地域の多文化社会づくりへの関心は向けられている。また、研修カリキュラムについて、カリキュラム検討委員会でも指摘されたが、5回の研修がつながるような流れになるべきとの意見があった。課題の一つでもあるが、日本語学習支援者育成という原点と研修の目標に沿うような講座の流れは常に考える必要がある。

5.1.3 第3回研修評価検討委員会——苫小牧市における研修評価

苫小牧市の研修【令和3年12月18日(土)～令和4年2月19日(土)】の終了を受け、研修評価検討委員会が開催され、以下の点について報告と審議がなされた。

- 1) 研修報告【研修目的、研修内容、研修カリキュラム、教材、受講者数・修了者数】
- 2) 審議事項:研修評価 【資料:①アンケート結果、②受講生の「ふりかえり」内容、③講師の「ふりかえり」】、質問、コメント

以下に、委員会による「総括」と「意見、特記事項」について記す。

【総括】

受講者は年齢層が50代と60代で全体の約84%を占めており、町内会関係者、主婦、会社員、介護福祉団体関係者、教員などと多岐にわたっていた。受講者数も他の2会場での研修より多かった(15名、修了者14名)。他の2市での研修と異なるのは、オンラインによる講座(3回、対面2回)になったことである。1名が途中から参加不能になったり、講座内容を一部変更せざるを得なくなった等の影響もあった。しかし、アンケート結果からは「とても満足した」「満足した」が全体の90%以上であり、しかも、「今後にとっても役に立つ」「役に立つ」の肯定派も同じく90%以上であったこと、自由記述(無記名)でも本講座への関心の

高さがうかがえるなど、概して研修目的は達成されたものと評価できると思われる。課題については、次の項に記す。

【委員からの意見・特記事項】

胆振総合振興局より、他の 2 市での研修に比べ、受講者数が多い理由について質問があった。広報を少し増やしたことと、苫小牧の地域事情(外国人が多い、多文化共生への関心も高いなど)が背景にあると考えられる。道の各振興局としては、HIECC(公益社団法人・北海道国際交流・協力総合センター)と連携して多文化共生に向けた取り組みが期待されているため、地域の活動には協力的な姿勢を示している(胆振総合振興局のコメント)。他の委員から、オンライン講座の影響について難しい面もあるとの指摘があった。一方で、別の委員からは、地域を超えて価値観の近い人が結びつく利点はある、ただし、地域内でのつながりを推進するために有用かについては不明であり、課題であるという意見が出された。

5.2 事業評価委員会による評価、総括

5.2.1 第 1 回 事業評価委員会——室蘭、伊達における研修について、カリキュラム・教材開発、研修内容と成果を総括、評価

【総括 1】

これまで開催された関連委員会、特に、①研修評価検討委員会、②研修カリキュラム検討委員会では事業全体の評価に関わるものもあり、それらを踏まえて、本事業全体を総括する。まず、室蘭、伊達、苫小牧と地域の特性や受講者の背景の違いはあるものの、第一段階の「意識の醸成」は達成できたと評価された。ただ、5 回の講座とフォローアップ講座で具体的な活動につなげていくことまでを研修の実績として示すことは求められる。室蘭、伊達の研修ではそれぞれ市役所の国際交流担当部署の方を交えて意見交換でき、今後の協力関係は期待できると思われる。また、事業全体に関して、汎用性のあるカリキュラムを開発し、人材育成を行なうために、日本語コーディネータの役割を担う人が必要だと実感する。現場の状況を把握し、中長期的な展望を持ってプログラム開発と人材育成に取り組むことが課題にもなると思われる。

【総括 2】

ここでは、主として事業評価委員からの意見を踏まえた総括を試みる。まず、同一地域(振興局)の異なる地域で、特性を考慮しながら回を重ねることに改善を試みたことは評価された(胆振振興局委員)。受講者については、特に伊達の場合、「心の伊達市民」というワークショップの参加者に声をかけ、町の活性化、多文化共生を呼び掛けた(樽見委員)結果、意欲的で活動経験の豊富な人材が集まった。今後は地域の調査も含め、特性をよく理解する人達を戦略的に集め、意識の高い市民に参加してもらおうようにするのが望ましい(森谷委員)という意

見のほか、「やさしい日本語」は居住者にも観光客にも有益なので、プログラムにもう少し時間を増やしてもいいのではないかなど、今後の検討課題を含む総括が行われた。

5.2.2 第 2 回事業評価委員会——苫小牧市研修を含む事業(カリキュラム・教材開発、研修内容と成果を総括、評価全体の評価、総括

【総括 1】

全体的な総括として、これまで関連委員会、研修評価委員会、第 1 回事業評価委員会でも報告された通り、研修目標の第一段階である、「多文化社会に向けた意識の醸成」、取り分け、相互理解、対等性の意識は各講座で浸透させることができたと思われる。さらに、フォローアップ講座も含めると、地域で外国人との交流、イベントの企画、そこから支援の具体的な活動を模索する動きも出てきている。意欲的な研修修了者が輩出され、そこから輪が広がれば、第一段階としての本研修の目的は達成されたと評価できよう。しかし、持続可能な人材育成と地域の発展を考えると、そこだけでは満足できるわけではない。

課題としては、すでに別の委員会でも指摘されているが、自治体と市民をつなぐ地域コーディネータ、またはそれに準ずる個人や団体の存在とリーダーシップにより、連携した活動の具現化を図ることである。今後もこの課題に向き合い、コーディネータの発掘と地域の学習支援者育成、自治体への協力の働きかけを引き続き行うことが求められる。

【総括 2】

次に、事業評価委員からの質問、コメントを踏まえた総括であるが、コロナ禍にあっても、対面やオンラインで研修が実施でき、多くの受講者を満足させられたことはよかったと評価された。オンラインは 3 市をつなげることも可能であるから、今後、胆振地域で他市町の受講者との交流を通して横のつながりを作ることもいいのではないかなどという提言もなされた。(室蘭のフォローアップ講座でも他地域の受講者との交流や協働的企画について意見があった。)事業対象地域の調査は引き続き行い、地域の学習支援者、または団体として適当な人材や組織を発掘できることが望まれる。胆振総合振興局でも地域の発展に貢献する人材の育成に可能な協力と支援を行いたいという姿勢を示している。

おわりに

胆振地方を中心に地域の日本語学習支援者養成を行なおうと、文化庁による「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」に申請した。採択が決まったことを受け、事業の枠組み、事業内容についての検討が始まった。対象とした地域は室蘭市、伊達市、苫小牧市と太平洋に面した港湾都市であり、運輸、水産、鉄鋼産業をはじめ、農業も充実しており、古くから海外との往来も盛んで、特に、苫小牧、室蘭には永住者、特別永住者も外国人人口の 20～25%を占める。それに加え、近年の外国人就労者の増加もあり、地域の多文化共生意識が芽生えていたことも事業取り組みへの後押しとなった。

地域の特性を踏まえたうえで、研修カリキュラムの概要を第一回研修カリキュラム検討委員会で諮ったところ、いきなり多くの質問やコメントを受けた。富山、東京ほか、他都市での学習支援者養成に長く関わってきた委員の方々から「ことばの研修」に重きが置かれているのではないか、研修後の展望も描いているか、など、先行きを見越した全体構想に質問が向けられた。さらに「上から目線」の学習支援者を養成しないように、特に、専門家のように日本語を指導する「エセ日本語教師」を作らないようにという注意を込めたコメントも出された。こうした厳しい忠告や意見を踏まえ、研修を構成する5回の講座内容には「相互理解」「対等性」「協働」の基本理念を意識化できるよう、講師にも協力を求めた。巻末資料に「ふりかえりシート」と「復習シート」の内容がすべて示されているが、胆振地域における日本語学習支援者養成研修の目標とした「住民の多文化共生意識の醸成」は達成できたと考えられる。そして、その先に「学習支援者による具体的活動」の成果を示さなくてはならない。フォローアップ講座の参加者(オンラインで任意参加)は全体の7割程度だったが、自治体の関係者と連携した活動について話し合いが持てたことは次の行動への具体化につながる。市役所、胆振総合振興局(北海道)の関係者と学習支援者研修の修了者の距離が少し近づけたので、次年度以降の活動の実現化が図れるよう努めたい。

研修評価委員会、事業評価委員会で評価と課題について示されているが、ここで触れられなかった点で課題の一つとして、住民の「多文化共生に対する意識」をより正確に把握するために、自治体とも協力して住民の意識をより広範囲に調査することを挙げたい。伊達市では一部地域で実施できたが、苫小牧では市との協議がうまく行かず実現できなかった。外国人を受け入れる地域住民の中から少しでも多くの学習支援者の資質を有する人材を発掘し、学習支援者のすそ野を広げることを積極的に行いたい。

もう一つの課題は、地域社会に存在する多文化共生社会のための学習支援者・支援団体と自治体や企業、教育機関等がどう連携して、機能的なつながりが持てるようになるのか、地域日本語教育コーディネータや学習支援者研修団体の役割や分担も明確に示せることが望まれる。次の機会があれば、検討課題としたい。

【謝辞】最後に、胆振総合振興局、苫小牧市、室蘭市、伊達市の関係各位、各種委員会委員、研修講師の方々、研修を受講された方々、そして本事業に関わっていただいたすべての皆様に感謝を申し上げます。皆様方のご協力で胆振地域で初めて実施した日本語学習支援者研修を無事に終えることができました。次年度以降も更に内容の充実を図ってまいりたいと思います。

(委員長 中川かず子)

【資料① 室蘭市研修のフライヤー】



令和3年度 文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」受託事業
[主催]学校法人 北斗文化学園 [後援] 胆振総合振興局・室蘭市



北海道



室蘭

外国人とともに暮らす社会について考える講座

～多文化共生の地域づくりを目指して～



胆振地域でも外国人が増えてきています。多文化共生の地域づくりを目指し、外国人との交流や日本語学習支援について、一緒に考えてみませんか？
私たちは地域の「日本語学習支援者」を探しています！
講義だけではなく、ワークショップを通して体験的に学ぶ講座です。

- 日程** 7月10日～9月4日のうち**土曜日全5回**
13:00～16:00 (3時間)
- 対象者** 外国人との交流や相互理解に興味がある方
胆振管内在住で全5回に参加できる方
- 参加費** **無料** (定員30名)
※ 事前申込が必要です。
- 場所** **北海道福祉教育専門学校** (室蘭市母恋北町1丁目5番11号)
※駐車場あります
- 申込方法** **E-mail、FAX、QRコード**からお申し込みができます。
詳しくは裏面をご覧ください。

日本語学習支援者とは
外国人が地域で安心して生活できるよう、言葉や文化理解をサポートする方です。
*日本語教師とは異なります。

	日時 / 講師名	内容
第一回	7月10日 (土) 13:00~16:00 湯山 英子	外国人とともに暮らす社会とは何か ・学習者の背景や多文化共生について考えます。 ・地域住民と外国人との関わり方について考えます。
第二回	7月31日 (土) 13:00~16:00 岡本 佐智子	多文化コミュニケーション～相互理解に向けて～ ・相互理解をめざすコミュニケーションの在り方について考えます。
第三回	8月7日 (土) 13:00~16:00 菅 泰雄	私たちのことばと地域 (北海道・胆振地方・室蘭) ・日本語の特徴について、地域の独自性 (方言・アイヌ語等) を交えながら考えます。
第四回	8月21日 (土) 13:00~16:00 佐藤 公美	外国人とのコミュニケーション ・外国人のための学習リソース (素材) を見てみます。 ・「やさしい日本語」はなぜ必要か考えます。
第五回	9月4日 (土) 13:00~16:00 中川 かず子	多文化共生の地域づくりに向けて ・外国人と交流し、気づきや発見から地域の課題を探ります。 ・多文化共生の地域づくりに向けて何ができるか話し合います。

*伊達市 (9月~11月)、苫小牧市 (12月~2月) でも開催します。



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、研修の際は、マスクの着用、検温、手指の消毒、体調不良時の欠席をお願いいたします。
感染拡大状況によってはオンラインでの実施に変更、または中止となる可能性があります。

室蘭会場での受講生(個人作業中)



室蘭研修で修了証を授与された受講生



【資料② 伊達市研修のフライヤー】



令和3年度 文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」受託事業
 [主催]学校法人 北斗文化学園 [後援] 胆振総合振興局・伊達市・伊達商工会議所



伊達

外国人とともに暮らす社会について考える講座

～多文化共生の地域づくりを目指して～



胆振地域でも外国人が増えてきています。多文化共生の地域づくりを目指し、外国人との交流や日本語学習支援に必要な心構えを一緒に考えてみませんか？ 私たちは地域の「日本語学習支援者」を探しています！
 講義だけでなく、ワークショップを通して体験的に学ぶ講座です。

- 日程** 9月25日～11月20日のうち**土曜日全5回**
13:00～16:00 (3時間)
- 対象者** 外国人との交流や相互理解に興味がある方
胆振管内在住で全5回に参加できる方
- 参加費** **無料** (定員30名)
※ 事前申込が必要です。
- 場所** **市民活動センター** (伊達市鹿島町20番地1)
※第1回目(9月25日)は緊急事態宣言が発令されているため、**オンライン**で実施します。
- 申込方法** **E-mail、FAX、QRコード**からお申し込みができます。
詳しくは**裏面**をご覧ください。

日本語学習支援者とは
 外国人が地域で安心して生活できるよう、言葉や文化理解をサポートする方です。
 *日本語教師とは異なります。

	日時 / 講師名	内容
第一回	9月25日 (土) 13:00～16:00 湯山 英子	外国人とともに暮らす社会とは何か ・学習者の背景や多文化共生について考えます。 ・地域住民と外国人との関わり方について考えます。
第二回	10月9日 (土) 13:00～16:00 岡本 佐智子	多文化コミュニケーション～相互理解に向けて～ ・相互理解をめざすコミュニケーションの在り方について考えます。
第三回	10月23日 (土) 13:00～16:00 菅 泰雄	私たちのことばと地域 (北海道・胆振地方・伊達) ・日本語の特徴について、地域の独自性 (方言・アイヌ語等) を交えながら考えます。
第四回	11月6日 (土) 13:00～16:00 佐藤 公美	外国人とのコミュニケーション ・外国人のための学習リソース (素材) を見てみます。 ・「やさしい日本語」はなぜ必要か考え、実際に使ってみます。
第五回	11月20日 (土) 13:00～16:00 中川 かず子	多文化共生の地域づくりに向けて ・外国人と交流し、気づきや発見から地域の課題を探ります。 ・多文化共生の地域創りに向け自治体と連携した活動を考えます。

※ 苫小牧市 (12月～2月) でも開催します。



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、研修の際は、マスクの着用、検温、手指の消毒、体調不良時の欠席をお願いいたします。
 感染拡大状況によってはオンラインでの実施に変更、または中止となる可能性があります。

伊達会場でのペアワーク作業後の発表



伊達研修修了後の記念撮影(留学生、ゲストとともに)



【資料 ③ 苫小牧市研修のフライヤー】



令和3年度 文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」受託事業
 [主催]学校法人 北斗文化学園 [後援] 胆振総合振興局・苫小牧市・苫小牧商工会議所



北海道

苫小牧

外国人とともに暮らす社会について考える講座

～多文化共生の地域づくりを目指して～



胆振地域でも外国人が増えてきています。多文化共生の地域づくりを目指し、外国人との交流や日本語学習支援に必要な心構えを一緒に考えてみませんか？ 私たちは地域の「日本語学習支援者」を探しています！
 講義だけではなく、ワークショップを通して体験的に学ぶ講座です。

日程 12月18日～2月26日のうち**土曜日全5回**
 13:00～16:00 (3時間)

対象者 外国人との交流や相互理解に興味がある方
 胆振管内在住で全5回に参加できる方

参加費 **無料** (定員30名)
 ※ 事前申込が必要です。

日本語学習支援者とは
 外国人が地域で安心して生活できるよう、言葉や文化理解をサポートする方です。
 *日本語教師とは異なります。

場所 **北斗文化アカデミー苫小牧 教育・研修センター**
 (苫小牧市表町5丁目5番8号 北星ビル5階)

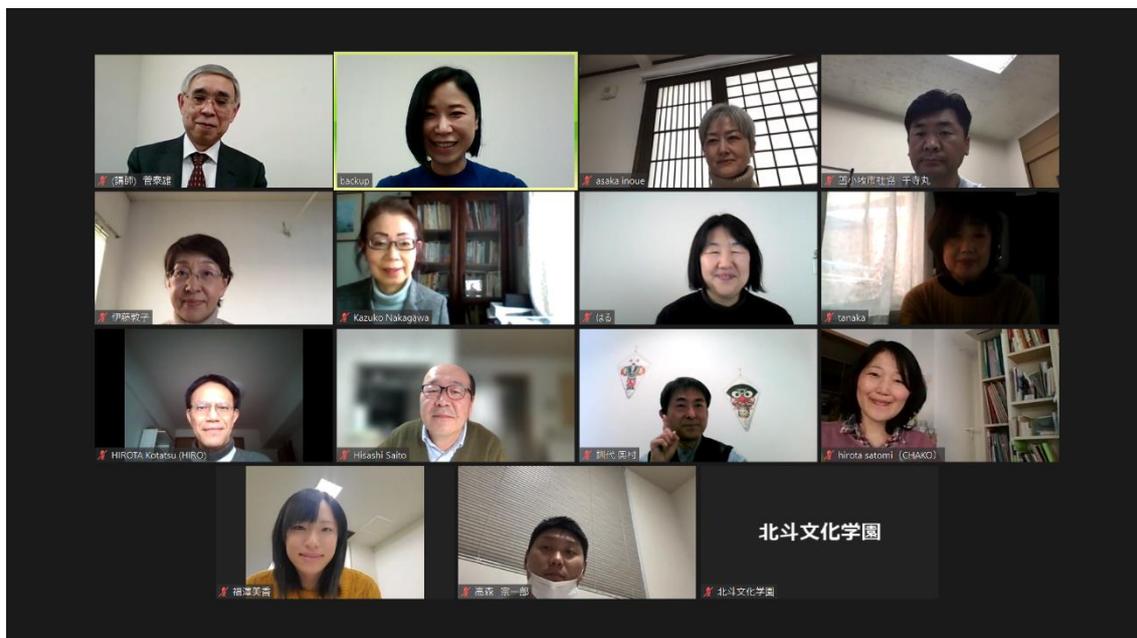
申込方法 E-mail、FAX、QRコードからお申し込みができます。
 詳しくは裏面をご覧ください。

	日時 / 講師名	内容
第一回	12月18日 (土) 13:00～16:00 湯山 英子	外国人とともに暮らす社会とは何か ・外国人居住者の背景や多文化共生について考えます。 ・地域における多文化共生に向けた活動と課題を考えます。
第二回	1月15日 (土) 13:00～16:00 岡本 佐智子	多文化コミュニケーション～相互理解に向けて～ ・相互理解を目指すコミュニケーションの在り方を考えます。
第三回	1月29日 (土) 13:00～16:00 菅 泰雄	私たちのことばと地域 (北海道・胆振地方・伊達) ・日常生活での日本語コミュニケーションの多様性と特徴を考えます。 ・地域の独自性 (方言・アイヌ語等) を交え、日本語の特徴を考えます
第四回	2月12日 (土) 13:00～16:00 佐藤 公美	外国人とのコミュニケーション ・外国人のための学習リソース (素材) を見てみます。 ・「やさしい日本語」の必要性を考え、外国人に理解しにくいものをどう改善するか、考えます。
第五回	2月26日 (土) 13:00～16:00 中川 かず子	多文化共生の地域づくりに向けて ・外国人と交流し、気づきや発見から地域の課題を探ります。 ・多文化共生に向けて外国人居住者への支援の意義や自治体と連携する活動について考えます。



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、研修の際は、マスクの着用、検温、手指の消毒、体調不良時の欠席をお願いいたします。
 感染拡大状況によってはオンラインでの実施に変更、または中止となる可能性があります。

苫小牧研修のオンライン講座（*1~2回は対面式、3~5回はオンラインで）



講義中の様子



【受講者のふりかえりシート、復習シートの内容】

(I) 室蘭会場

①第1回目講座 ふりかえりシート

1. どんな発見がありましたか。

・外国人の方たちの困っていることや、技能実習生としての周りの環境など、様々なことがわかった。

・高校生が身近な問題として技能実習生の事件について深堀し、映像を作っていたこと。

・道内、100人以上在住者が20都市(自治体)もあり、支援の必要性を感じた。雇用主への教育及び、啓発が大事と感じた。現状、メインは「草の根支援」の方が活躍しているということがわかった。

・在留資格「介護」の人数が少ない。その中で介護福祉士に合格している外国人をととても尊敬する。

・日本で働く外国人を支えるために、多くの人たちが努力をしていることを実感した。また、北海道の産業を支えてくれている外国人の暮らしを知ることができた。

・北海道に暮らすベトナム人の現状。イギリスで見つかったコンテナ事件は記憶に新しく、ショックを覚えたものだった。チャーミーさんのような悲劇が再び起こらないことを切に願う。

2. 自分が思っていたことと、違ったことは何ですか。

・技能実習生について、受入れ先の環境で対応の違いがあったり、途中で失踪したりすることに驚いた。

・自分が今まで接してきた外国人は留学生や観光客、同僚だったので、知らないことが沢山あった。

・来日し、2年間も借金返済し、3年目から余裕が生まれるとのこと、遠い国に来て我慢強く働いていることにが素直にすごいと感じた(もつとすごく稼いでいると思っていたので)。

・「労働力」として見ている日本人がいることは、日本人として残念だ。

・ベトナム人が建設現場で働いていることなどはよく耳にしていたが、その裏で表には出てこない問題や悩みがあることを改めて知った。

・技能実習の方はとてもすばらしい人たちだし、とても必要な存在なので、皆が大切にしていると思っていたが、パワハラ、不当な労働環境があることがショックだった。

・人権などについても、相談できる場所を作っていること。元々各地から入植しているからか、北海道では偏見が少ないのが意外だった。

・地域によって、外国人の数、国籍、在留資格の種類が違うことを改めて認識した。

3. 何かできそうな気になりましたか。または、講座の感想。

・外国人との交流の場など関わる場所などの探し方もよくわかっていなかったが、ホームページなどを見てみたい。

・人が好きで、外国人にも興味があるので、一緒に働くことも増えていくだろうし、偏見のない町でお互い暮らせるようになることを願っている。今度実習生を見かけたら声をかけたい。大好きなバインミーの作り方も習いたい。

・実際に職場で働いている外国人を見て、気付かされることが多々ある。相手の立場に立ち、外国人労働者をフォローしていきたい。

・ベトナム文化をもっと知りたい。実際にベトナム人と一緒にベトナムにも行ってみたい。

・ベトナム人は日本人に国民性が近いと感じていたが、それこそが日本人としての傲りなのかなと感じさせられた。

・外国人と交流を持とうとしている人と知り合える機会になりそうで、講座に参加してよかった。

・コロナ禍を理由に様々な行事等の企画の幅を狭めるべきでない。

②第1回講座 復習シート

1. 第1回目の講座の後、地域の状況について確認できたことや気づいたことを書いてください。

・技能実習生が多いこと。技能実習生等に対する労働環境が良くない場合もある。貴重な労働力だとも思う。

・大型ショッピング施設でたいいてい2~6人の集団で外国人を見かける。室蘭は港町なので船で来た外国人もいるので在住者とは限らない。たくさん買い物しているのは、船で来た外国人かもしれない。

・新型コロナウイルスの流行の影響なのか、昨年度から留学生の子どもの入園がない。室蘭市内。

・英語圏以外から来た外国人が多い。

2. 身近な外国人には、どんな人がいるかこれまでに経験から思い浮かべてください。

・英会話講師、ジャンベ奏者、大学の教授。何をしに来たのかかわからないがセネガル人は身元保証人のところから黙っていなくなってとても迷惑をかけていた。

・室工大留学生とその家族、ALT、日本人と結婚した外国人の奥様たち、ネパール人医師と奥様、娘さん、日本企業の研究員、北斗文化学園の留学生と副校長のブリュノ先生。

・技能実習生、学生、温泉街で働く人たち

・留学生(ベトナム、中国)、技能実習生(ベトナム、中国)

・コンビニの店員さん(主に都会)、北海道を訪れる観光客、温泉ホテルのフロント(通訳)、留学生、 就労者

・怪我、病気で来院する外国人

3. 外国人がこの地域で生活するときにどんな難しさがあると思いますか。また、日本人ならそれほど難しくなくても、彼らにとっては難しいことは何だと思いますか。

・社会資源や、制度(病院など)の活用。

・役所的な書類、手続き、法律、日本のルール。

・日本語表記のみの機器の操作。日本のトイレ(洗浄機能とその他の操作)、自動販売機、お金の支払い

・病院にかかること。今は発熱があるだけでも事前に電話をしたり、別室に案内されたりするので、苦勞するのではないかと想像する。

・日本語、漢字、カタカナ、文化や習慣の違い(日本食)、住む所(家探し、保証人とか)

・各種申請書を書くこと。災害時の避難全般。家を借りること(保証人とか)など。

③第2回目講座 ふりかえりシート

1. 外国人とのコミュニケーションで大切なことは何だと思いますか。

・話す速度や理解しているかを認識しながら話す。ジェスチャーを取り入れる。

・丁寧なわかりやすい言葉を使うこと。伝えようとする姿勢。

・伝えたい意欲と相手の話すことをききとり、理解しようとする心意気。

・伝えたい純粋な気持ち。伝えるために様々な道具、人を使う。

・相手に伝わるように意識をして対応すること。わかりやすい日本語で短く伝えること。

・自分が知っている言葉が必ずしも外国人が知っているとは限らないので、その辺意識した対応が大切だと思う。

・日本人と外国人とではバックボーン(知識、育った背景)が違うことから、そこを念頭においた文書作成が必要。

・相手に理解してもらおう(もらいたい)という気持ち。伝えたい、相手のことをもっと知りたいという気持ち。

・正しい日本語の使用。正しく美しい言葉で。伝える気持ちと目力。

2. 「やさしい日本語」で重要なことは何だと思いますか。

・誰もがわかりやすい表現、見やすい文章。

・情報は必要最低限。わかりやすく。図や絵、視覚情報も入れる。

・なるべくシンプルな文で、要点を最優先で主語を省略せず、表現するよう心掛ける。

・余計な情報はいらない。本当に伝えたい部分だけ伝える。

・難しいことはばは使わない。シンプルさ。何を最も伝えるのかの取舍選択が重要。

・簡条書きと表による表現の大切さ。

3. 今回の講座を受けて、新たに気づいたことがありましたか。

・相手の立場になって話をしたり聞いたりする。

・各自治体の差はあるが、公共団体のHPなど、わかりにくい。

・日本語への考え方←外国人に限らず、難しい日本語に困っている人はたくさんいる。

・やさしい日本語は日本人にも理解されないと、外国人にも理解されない。文章だけでなく、絵やグラフ、ピクトグラムも有効である。

・自治体のHPは日本人にも理解するのが難しいのだとわかった。

「まず日本人にも理解できるか」を考える。

・自分の話し方、書き方など、まわりくどいと気づかされた。今後は今日の講座で学んだことを取り入れていく。

・外国人が、何に困っているのか、想像していたのと同じ部分、違う部分の確認ができた。

・横浜市の水道料金のお知らせのように私たちが普段生活していて気づかない所に外国人がわからない、理解できない表現が身近にあふれているということに気づかされました。

・やさしい日本語は簡単にすればいいだけではない。

④第2回目講座 復習シート

1. 第2回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づいたことを書いてください。

・日本語での表現の難しさ。日本人も日本語を学ぶべき。話し言葉と書き言葉の違い。

・時には皆がやさしい日本語を使用する必要がある。

・「やさしい日本語」表記のHPを持つ先進的な自治体があること。

・自分の文章も長くなりがちなので、できるだけ短くわかりやすく。

・仕事に講座で学んだことを思い出し、自分も含め、職場の人達も相手に伝わりにくい日本語を使っていることに気付いた。

・本当に伝えたい言葉(情報)が何かを考えるようになったと思う。

・様々な場面で外国人に理解しづらい文章が見受けられると感じた。

2. 身の回りで「やさしい日本語」にした方がいいと思うものを書いてください。

・病院での説明 ・役所での説明

・大事なお知らせ ・学校からの案内・お知らせ ・使用上の注意

- ・市役所の案内表記(秘書課以外) ・病院の案内 ・個人の店 ・新しくない交通表記 ・回覧板
- ・市役所ホームページ内の文章
- ・市役所からの書類(仕事上、保護者に渡し説明することが多いが、もらった保護者が書類を読んでも伝わりにくい)
- ・防災情報、 ・医療関係情報 ・テレビ等の情報番組(ニュース等)
- ・日本人と外国人が交流を深めるイベント情報

3. 周りの人(国籍不問)とのやり取りで、気をつけるようになったことはありますか。

- ・ゆっくり話す。相手がわかっているか確認しながら話す。
- ・よりわかりやすく伝えるように言葉を選ぶようになった。
- ・言い換えに役立つボキャブラリーの蓄積。
- ・プライベートな質問は親しくなるまでしないようにしている。
- ・イベントに参加している外国人には時間や食事制限を尋ねること。
- ・伝えたい情報だけを短くわかりやすいようにジェスチャーなどを行いながら話すようになった。

⑤第3回目講座 ふりかえりシート

1. 講座を受ける前と後で、日本語に対する認識は変わりましたか。新たに気づいたこと、再認識したこと等、自由に書いてください。
- ・多様性がある・方言、地域方言、社会方言がある・日本語は聞き手責任型言語であるということに気づいた。
- ・私の夫がいつも「～してよ」型であることに気が付きました！
- ・助詞の使い方は本当に難しく、選ぶときに迷います。
- ・新たに気づいた事は、日本人は形容詞を叫ぶのだということ。再認識したのは、語順に気を付けてこれからも話そう、書こうという事。
- ・日本語はあいまいな表現や名詞が多く、外国人が学ぶのにとってもハードルが高い言語だと思っていたが、世界で9位になるほど外国人が日本語を学んで話してくれている事にとっても驚きました。
- ・日本語といっても様々な要素があり、難しいと改めて感じました。
- ・日常生活の中で話すことばや文章の中におかしいと思うことがあることに気付いたので(今までは自分なりに勝手に解釈していた)話し方に意識しながら相手に伝わるようにしていこうと思いました。
- ・言い回しなど、ちょっとした各国での違いは事象のどこに着目しているかによる部分にヒントがあったことを知ることができた。聞き手責任型言語と話し手責任型言語の視点が面白かった。
- ・日本語は特殊な言語ではないことがわかりました。これまでは、経済的価値のある言語の英語の語順とは違うので特殊なのではない

かと思っていました。

- ・方言やニュアンス等、日本人でも中々むずかしいことがあります、誇りを持っていきたいと思いました。
- ・語学学習が好きで、私も色々な国の言語を学んできましたが、改めて日本語の奥深さを知ることができました。
- ・方言もとても興味があったので、面白かったです。仲の良い友人が石川、兵庫、長崎におり、方言を真似てメールしたりしますが、ニュアンスが全然違うようで直されます。

2. ことばの多様性ということについて、考えを述べてください。

- ・〇〇型表現やあいまい表現がより多様性になっていると感じた。
- ・年代によって使う言葉は違うが、みな自分の表現にしたいこと、伝えたいことを言えることが大切かと思う。また相手とのコミュニケーションを円滑にするため、「正しさ」ということも大切だと思う。
- ・ことばの変化(ら抜き化していくことばなど)になかなか柔軟についていけないと感じる。若者言葉にもつい拒否反応を示してしまう。もっと許容範囲を広げないといけないと思う。
- ・ことばは生き物で10代の子も達が新しい日本語、流行語を作り出して、世間に広まっている現状をすごいと思った。これから外国人も日本語を使う上で便利になるように新語が作られるとよいと思う。
- ・講座の中で方言にも社会方言についてふれていたが、今まで使っていないも気づかなかった。
- ・同じ文章でも話者の立場を意識する重要性が必要と考える。
- ・話者の出身(国、地方)を知ることが相互理解の一助になると思う。
- ・私自身崩した言葉や流行の言葉を使うことが多々ある。しかし、今回の講義を終えて、もっときれいな言葉を意識しようと思った。
- ・方言も外国語も含めてその人らしさを作るものとしてとても魅力的なものだと感じた。

⑥第3回講座 復習シート

1. 第3回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づいたことを書いてください。
- ・日本語の独特の言いまわし。年代差による表現の違い。
- ・日本に住む外国人はこちらが考える以上にいろいろな不便さや不安、不満を抱いているのだなと思った。
- ・普段、特に気にせず話している日本語も実はすごく複雑で混乱をまねく元になっているのだなということ。
- ・全国チェーンの飲食店の店員の話す文は「ナル型表現」が多い。
- ・自動詞と他動詞の使い方、「が」「で」「など」「でも」を注意深く聞き、

相手の気持ちなどを判断するようになった。

- ・相手に伝えようとする中で文が長くなり、わかりにくくなってしまふので、できるだけ短い言葉や文章を意識して伝えるようにしている。
- ・普段の会話で方言を少し意識するようになった。
- ・今回の講義で音の体験などを見出し同じ「言葉」でもニュアンスや受け取り方の違いで様々な意味になるのだと改めて気づいた。

2. 相互理解にとって一番大事なことは何だと思いますか。

- ・正しい文法を使用。標準語を使用。違いを受け入れること。
- ・わからないことをそのままにしたり、適当に流さず、ある程度お互い理解し合うまで話してみるのもいいかもしれない。
- ・理解したいと純粋に思う気持ちや気づかい
- ・お互いの文化や考えなど理解し認め合うこと。
- ・相手の出身(国、地域)での育った環境。まず相手を知ること。理解すること。聞く姿勢。共感。

3. さらに日本語について学ぶとすればどんなことを学びたいですか。

- ・色々な方言や、現在は使用していない(いわゆる死語)について。
- ・外国人の感じる日本語の特徴や好きなところイヤなところについて学ぶというより「知りたい、聞いてみたい」。
- ・地域方言
- ・日本文化と日本語の関わりや、方言などによる言葉の違いに少し興味をもった。
- ・学んだことを活かせる場で実践し学びたい。
- ・北海道の人は「しばれる」と聞くと感覚でわかるが、あたたかい地方に行くとうわらないと思う。このような土地、土地の言葉、方言を知ることが出来、感覚で感じられたらより深く日本を知れると思う。
- ・尊敬語と謙譲語の使い分けがまだにわからなくなることがあるので、しっかり学びたい。

⑦第4回講座 ふりかえりシート

1. あなたのこれまでのコミュニケーションで、自分の価値観やコミュニケーション・スタイル について、気づいたことを書いてください。

- ・話し方(声の大きさ、言葉の選び方)で相手に内容やとらえ方が変わることがある。
- ・聴く態度も重要だ(話す方より)と感じた。
- ・人を信用するには時間がかかるものだと思っていますが、人を否定する気はないです。ただ、どんな人なんだろうと接する中で見つけていくタイプだと思います。
- ・何もかも受け入れるわけでもなく、我を出すわけでもなく、ただ、そ

の時その時の状況に合わせたり、色々考えたり、考えなかったり。そんなコミュニケーションを取っています。

- ・自分のものさしを中心に話していたように思う。外国人の方達と話す時は、なるべく客観的に見て聞いて理解するようにしているつもりだけれど実際は全くできていないのだろう。
- ・自分の価値観というフィルターを通して相手の事を決めつけがち。
- ・コミュニケーションをとるのが苦手だといつも思っていたが、判断保留について学び、すぐに返さなくてもいいんだと思うことができた。
- ・これまで育って、生活していた背景が「自分」の価値観をつくり、知らず知らずのうちに、相手に「そうなんだね」と決めつけていたかもしれないと思った。意識して思い込みの枠を外していこうと思う。
- ・自分から進んでコミュニケーションを取りに行くスタイルだが、よく「ツッコミが激しすぎ!」と言われるので、無意識に相手を傷つける”マイクロアグレッション”をしていないか心配。よく注意したいと思う。
- ・前に接客業とかしていて相手の気持ちに気付く方と思っていたけれど、無意識の時は相手を無視してるかもしれない。

2. 多様な価値観の人々と相互理解するためには、どんなことが大切だと思いますか。

- ・相手に対する態度(理解しよう)、まずは自分を理解してもらう。
- ・それぞれの良い所は認めて、ゆずれない所は話し合っ、着地点を見つけていきたいので、やはり、言葉をつくしての話し合いとわかり合おうとする努力が必要だと思う。それを心がけていきたい。
- ・相手を理解しようとする気持ちや態度(アイコンタクト、ジェスチャーなどで)を示す。
- ・相手のプライバシーを気にかけて、言葉がけする。
- ・自分を知ること、多様性を受容していくこと。みとめ合うこと。
- ・多文化共生とは言うは易し、行うは難しいことが身を持って分かった。やさしくはないが、実践していきたい。
- ・自分の思いや背景を真白にして相手のことを聞くこと、知ること。決めつけではなく、無限の答えを意識することが大切だと思った。
- ・初対面でも相手に興味を持ち、よく聞いて話を聞くことで共感したり、気持ちが近づくこともあると気づけた。
- ・プラスにするコミュニケーションを意識的に取ることを大切にする。

⑧第4回講座 復習シート

1. 第4回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づいたことを書いてください。

- ・自分がこれまでの人間関係であたりまえと思っていたこと、誰にで

もある常識だと思っていたことが、あまり通じない人との関わりが最近あった。どんなに説明してもわかり合えず、日本人同士でもコミュニケーションは難しいという経験をした。多文化・多言語社会では言葉がすべてだというが、それもままならないこともあるのかと驚いた。

・年を取ると、初対面の人との会話より、2~5 回会った人とのコミュニケーションが難しく感じる。

・コミュニケーションの取り方、先入観をもたないように。

・人の話を聴いた上で意見を言い合う場面が増えた。

・家族の話は無視しがちだったことに気づき、大いに反省した。(顔や体を向けない、適度なあいづちなど)

2. あなたは自分のステレオタイプや価値観にいくつ気づきましたか。

・生まれも育ちも日本で、同年代なら「暗黙の了解」の基準は違わないと思っていたが、それは思いこみであった。

・カードゲームのように一切言葉を発しないで進めると、簡単な事でもギャップが生じる。それをすり合わせて共通認識にするのは言葉無しには不可能に近い。

・初対面の外国人と会う度に、その国に対する先入観で見えてしまう。

・これまですりこまれてきた、各国のイメージはなかなか強いなと感じた。日本人はまじめで働き者だ、など。

・大阪人は明るく陽気な人が多いとか、南国の人は大らかだが、時間を守らないことが多いなど。

・高コンテキスト、言わなくても分かると思っいることも多かった。

3. あなたがこれからコミュニケーションをするとき、何に気をつけようと思いましたか。

・言葉。自分が伝えたいことはシンプルではっきりした言葉で短い文にして伝えよう。とにかく言葉をつくそう。

・相手の見た目や国の文化を基準にして対応しないようにする。

・自分の価値観をおしつけない。

・相手との会話時はアイコンタクトとあいづちを適度に入れること。

・自分の価値観など相手にも伝わるだろうと思わず、すべてことばにして伝えていくようにしていこうと思う。

・先入観を持たないで相手に集中し、何が言いたい話を聞く。

・外国人のみならず、高齢者と接する時にも気をつけたい(介護科)

⑨第5回講座 ふりかえりシート

1. 留学生と話して、何か気づいたこと、新たな発見がありましたか。

・私たちは普段気にしてない当たり前なことを彼らは気づき、よく見るとということがわかりました。ほめる文化。

・ベトナム⇔日本の違い 日本はほめる◎、ベトナム× ベトナムではほめられるのがはずかしい

・日本では議論は×だが、ベトナムではお互いを知ってもっと仲良く

・想像以上に生活が大変(アルバイト先が少ない、給料が低い、一般的な家賃や保険料が高い、天候、病気になった時、物価が高い)。

・異文化理解、相互理解があらゆる場面で必要。地元民の外国人に対する先入観

・日本語学校以外での日本語を学ぶ(教室)などが身近にない。

・交通の面(公共交通機関が都会に比べて不便)

・留学生は人生プランがしっかりしているから頑張れるのかと感じた。

・日本人の間接的、曖昧な話し方に惑いを感じていて、外国人と話す際はもっと直接的で良いのではと感じた。

・東京でコンビニのアルバイト店員さんが外国人ばかりなので疑問だったが、今回理由がわかった。そして、留学生のアルバイト事情が大変なこと、コロナでバイト時間も減らされている中で祖国に両親に仕送りもしていること、本当に頑張っていることに感銘を受けた。

・東京は便利だし、アルバイト先も多いが、コロナ後は学校もアルバイトも行ける状況ではなく 室蘭でよかった。

・保険料や税金など負担がたいへんそう。市役所でお金全般の相談ができればいいのに。

2. 外国人住民と日本人住民の共生を目指す地域づくりのために、何ができるか考えてみましょう。

・私たち住民は子供の頃から多文化への理解を学ぶべきだと思います。小中学校での多文化共生教育を。

・子供のための対策も必要。小さいことが継続的にあれば。親子で学ぶ機会を増やすことが大事。

・「外国人」というハードルを下げることで、地域住民として考えられる人を増やす活動をする。

・職場(市役所)での外国人への対応環境をいっそうレベルアップして整えることが一歩目かと思う。

・情報発信(SNS、報道)や共有、情報を共有する場があるといい。

・法や条例整備(留学生の保険料や税金の低額化)

・相互の国の文化的背景、習慣の違いを理解し、深めることでお互いの誤解している部分などの解決に役立つのでそういった機会があれば良いと考えた。文化背景、お互いの理解が必要。

・今回、留学生のお話を伺って、自分にも力になれることはないかと感じた。こういう機会があればもっと、意識も高まるかもしれない。

- ・困っている人に手を差しのべられる仕組みづくりが必要と感じた。
 - ・日本人と同じくらいの仕事の選択肢があること。そのためには、語学力や偏見がなくなることが必要。
 - ・外国人が働ける場所がふえてほしい。雇用者に助成金があったらいい。ハローワークに頑張ってもらいたい。
3. この地域に相応しい共生社会のために、「相互理解」「対等性」「協働」というキーワードを念頭に置きながら、具体的な活動を考えてみましょう。
- ・定期的に小中学校で交流会等を開き、相互理解の機会を増やす。
 - ・国・地方公共団体が積極的に活動費を出すこと。
 - ・外国人だからと構えるのではなく、日常的に関わられる状況的なもの。
 - ・地域(町内)のお祭りなどで、外国人の方の国ならではの料理などを提供してもらい、交流の機会を作る。
 - ・フリーマーケット等での出店、食文化交流～小さな活動を増やす。
 - ・理解講座も市内の全学校で全ての児童生徒に向けて開催を。
 - ・雇用主への助成や支援
 - ・広報活動(SNS、報道)、情報の共有の場(相互理解)
 - ・外国の方が暮らしやすいシステム作り(窓口など常にわかるもの)
 - ・役所、行政の情報発信(通訳などボランティアがあることをもっとアピールしては?)
 - ・相互理解と対等性はリンクしていて、お互いの文化価値観を学ぶことでリスペクトし、対等性が生まれると考える。協働していくのも、上記2つの理解が深まることで自然とできるのではと感じた。
 - ・大人の方にもっとこういう場(講座)に足を運んでもらう仕組み作りは大変だが、学校の授業で子供たちに伝えることはできるのでは。
 - ・日本人の外国力をつけることも必要
 - ・外国人が日本で対等に働くためには日本語力もないと難しい。自分で制度が調べられるくらい。

(II) 伊達会場

① 第1回講座 ふりかえりシート

1. どんな発見がありましたか。
- ・こんなに多くの中国人とベトナム人が来られているのにも関わらず、外国人実習生と市民との接点がないことに改めて気づいた。
 - ・伊達市で働いている外国人は中国系の人が多いと思っていたが、ベトナム人が多いとは知らなかった。
 - ・北海道在住の外国人の多さ(少なさ)に、改めてびっくりした。
 - ・外国人技能実習機構の存在。

- ・技能実習生に日本語指導するニュースはすばらしい'win-win'だ。
 - ・紋別市の国際交流は市民の意識を高め非常に良い。
 - ・市として生活ガイドブックは重要(枝幸の事例)。広報あかびらのおもてなしは良いアイデア。
2. 自分が思っていたことと、違ったことは何ですか。
- ・伊達市には以前から食肉加工会社に中国人実習生が来ていることは知っていたが、ベトナムの方がこんなに多いとは驚きだった。
 - ・ベトナムの方が3年間で6億ドン(約287万円)を貯めて帰郷されるという話もリアルで参考になった。
 - ・特に違っていた事はなく、まだまだ北海道は外国人にとって受入態勢が整っていない事を感じた。
 - ・事業者家族が生活面を見る実態はやはりかなり負担。
 - ・技能実習生の方が大切にされていないという実態を知り、戦中の強制労働をイメージしてしまった。そこまで酷くないまでも、流言飛語で陥られる等、日本人の中にその種の人達がいることは残念だ。
3. 感想と意見、自由記述
- ・伊達市には中国から伊達に嫁いで来られた方がいて、その方を中心に日中友好協会ができて、年に1~2回交流会がなされているが、協会に入っていない方とは接点がないので、普段から市民とともにイベントなどができたらいいのではと感じた。
 - ・今回はベトナムの方もたくさん来ていることを改めて認識したので、こうした外国人実習生との交流の場をどうしたら設けることができるのか、考えるきっかけにもなった。
 - ・日本語学習の場の話も興味深かった。彼らが望んでいるのなら、退職教員などが多い伊達市であれば、ボランティアを買って出る方も多い。機会を創出するために市役所に協力してもらおうとよと思う。
 - ・日本も欧米と同じように外国人労働者なしでは色々な産業が成り立たなくなってきた。特に農業・介護・等。
 - ・送り出し機関及び、ブローカーの問題はベトナム政府にもしっかり管理してもらう必要がある。
 - ・国策としての「日本語習得」可能なシステムが必要。
 - ・お互いの母国語が理解できればお互いがHappy!
 - ・受け入れ側として労働力の確保。外国人実習生としては技能の習得。それぞれがwin-winの関係になれる体制作りが大切だと思う。
 - ・少子高齢化が進んでいる中で、日本語学校作りは国が財源支援をする形で取り組むべきなのではないかと思った。実習生から授業料を頂けない現状だからボランティアに頼るというのは少し違う。

②第1回講座 復習シート

1. 第1回目の講座の後、地域の状況について確認できたことや気づいたことを書いてください。

・よく見かける 40 人くらいの外国人女性は隣町の水産加工会社で働く実習生だと思われる。実習生とはいえ、私たちの地域にとっては大事な労働力であり、生活者である。もっと地域との関わりを持ってもらい、帰国後も来てもらえるなど、場合によっては移住してもらえるような関係性を作るきっかけづくりは大事ではないかと感じた。

・北海道に移住している外国人の多さ。どの様にしたら北海道に根付いてくれるのかも疑問に思った。

・伊達在住の外国人 214 のうち、中国人 63 名はほとんどが第一ブローラーで働いている。日中友好事務所まで存在する。

・この地域ではないが、コロナ禍で帰国もできず、異国で日本での心の拠り所はあるのかなと思った。

2. 身近な外国人には、どんな人がいるかこれまでの経験から思い浮かべてください。

・NPO による子供向け学校ができたことで、その学校に入るために外国から移住してきた親子が身近にいる。

・教員になって生活をしている外国人。

・一番は留学生が多いと感じていたが、最近では「労働」を目的とした方が非常に多い。

・日本語が得意ではない外国人。孤立している人。

・日本人女性と結婚して生活している人。隣人の香港系カナダ人

3. 外国人がこの地域で生活するときどんな難しさがあると思いますか。また、日本人ならそれほど難しくなくても、彼らにとっては難しいことは何だと思いますか。

・買い物や交通手段、そして病気になったときの対処など、日本人はまったく意識しないのでできることが、外国人には一つ一つハードルになっていることは感じる(たまに交流することで、その難しさを聞く)。

・日本語の難しさや日本語でしか表記されないものも多く、私達はもっと彼らの困難を理解する必要があると思う。

・ゴミの分別は難しいと感じる。日本人の私でも表を見なければどの様に捨てるのか判断がつかない物もある。

・降雪、親同士のつきあい、食べ物が出合うか気になる。

・地域のコミュニティー

に溶け込むのが難しい。

③ 第2回講座 ふりかえりシート

1. あなたのこれまでのコミュニケーションで、自分の価値観やコミュニケーション・スタイルについて、気づいたことを書いてください。

・職業柄、話す、聴く、という行為では努めて気を付けて接しているが、無意識のステレオタイプがあるかもしれないと気づいた。

・相手の話をきちんと聞くということはわかっている、実際の自分は出来ていない事が多くあると気づかされた。

・高コンテキストの中で生きていることに気づかされた。何も言わなくても事が運ぶことは楽だが、それは通じない世界を改めて認識することが大事だと思った。

・各人が各人の思想、宗教、教育、文化で生きているため、会話は非常に気を付ける必要がある。

・自分が無視されていても、まったく気づかない人間だとわかった。

・先入観は本当に恐ろしい判断材料になるのだと理解できた。

2. 多様な価値観の人々と相互理解するためには、どんなことが大切だと思いますか。

・相手を理解しようと思う気持ち、姿勢で人と接することが大切だ。

・自分がされて嫌だと思うことはしないという基本的なことを忘れなようにしたい。

・物事の価値観にとらわれず、柔軟な対応が必要。

・低コンテキストを意識してコミュニケーションすることは大切だと思う。

・しっかりと意見をもち、お互いが分かり合えるまで議論、話を。

・相手を思いやる気持ちが大切だと思う(やりすぎはダメだと思うが)。

・自分の価値観を押し付けない。

④ 第2回講座 復習シート

1. 第2回目の講座の後、地域の状況について確認できたことや気づいたことを書いてください。

・いかに普段高コンテキストで毎日を送っているかに気づかされた。

家庭はもちろんだが、仕事も基本的には新しい出会いは稀で、10年、20年一緒に仕事をしてきた方々ばかりなので、相手のことをあまり考えていなかった。

・日本人同士でさえも新しい出会いがない中で、外国人、異文化に対応するのは、かなり戸惑いがある。

・普段何気なく行っている、何か別な事をしながらの他者の話を聞くと言うことは、きちんと話が聞けておらず、どちらも中途半端にしてしまふという事がわかった。

2. 自分のステレオタイプや価値観について気づきましたか。

・テレビなどのメディアの情報を鵜呑みにしていないか考えさせられた。

・新聞に雑誌の見出しが広告として掲載されていることがあるが、そうした見出しを見て、わかったような気になることもあり、いかに自分で調べて情報を得ていないかということを反省した。

・外国人との接し方、コミュニケーションの取り方を再認識した。

・言語が異なる場合、コミュニケーションが難しい場合は、より一層相手を想う心遣い、許容(寛容)が必要だと考えさせられた。

・SNS や TV 等に流れる情報には常々何故そうなっているのか本当にそうなのかと疑問に思う様、心掛けている。

・自分の考えをしっかりと相手に理解してもらおうべく、立ち位置を替えずに伝える努力をしているも、まだまだ日頃の話では“High Context”になっているのではないかと反省した。

・自分ではフラットに人と接する様に気をつけているが、育った国や環境が違くと自分の常識は相手にとって非常識であるかもしれない。

3. あなたがこれからコミュニケーションをするとき、何に気をつけようと思いませんか。

・初対面の外国人にその人の背景について質問する傾向が強い日本人の話は、面白かった。きっかけを探る手法は、年齢、郷里、学校、部活、仕事など相手との共通点を見つけること。日本人同士ならよいが、こうした背景と共通点を探る質問はやめるべきなのだろう。

・日本人であろうと、外国人であろうと目の前の相手をよく見て会話し、相手を思いやる気持ちを忘れない。

・人と人として、最初の一步をしっかりと掴んでいく心構えが大事。

・相手が誰であろうと臆せず、TPO を考えながら、相手の立場も考えて話すことを忘れずにしたい。

・話すスピード、内容が遅くまどろっこしいことも少し我慢して話を聞く。

・相手にとって話しやすい雰囲気作りが大切だと感じた。

⑤ 第3回講座 ふりかえりシート

1. 講座を受ける前と後で、日本語に対する認識は変わりましたか。新たに気づいたこと、再認識したことなどを、自由に書いてください。

・無意識に感情で言い方を変えている。

・方言を使ってもいいと改めて感じた。

・外国語だけではなく日本語もこんなに違いがあることを認識した。

・多文化共生にはまず日本語の理解が大事だ。

・正しい日本語が自身の尺度であるというのはその通りだと思った。

・言語の変化に対応する能力も必要だと思った(「こんにちは」は違和感があるが)。

・日本語の形を固定的に理解していたが、結構流動的で、その時代

によって間違った使い方が実は正しいとの認識は面白い事実である。

・自身が普段何気なく使用している言葉が実は方言と呼ばれるものであったり、イントネーションの違いなどは多岐にわたるのだと改めて感じる事ができた。

2. ことばの多様性ということについて、考えを述べてください。

・共通認識のために標準的なものは必要かと思うが、方言をなくすことはないと思う、それも文化の1つかと思う。

・ことばの多様性と変化はその時代に合わせて変化していることを認めると共に、思い込みに気をつけて理解に努めることを忘れないようにしないとと思った。

・日本人同士でも意思のやりとりは言語だけでは難しい。表情や身振りも加えて言語は完成するのかもしれない。

・日本にも多種の方言があるが、外国語にも南と北では方言がある。決して日本語は異質でなく、言語の一つとして捉えることも大事だ。

・言語は背景にある生活習慣や文化等で変わり得る事を認識した。それを基に異文化コミュニケーションを取る必要があると思った。

・どうしても言葉が中心になると思っていたので、多様性はそれ以外の伝える力も必要だと感じた。

・ことばは変化していくものであるということであったが、昔ながらの素晴らしい日本語(キレイな日本語?)と現状に沿った日本語を柔軟に使い分けてコミュニケーションを取って行きたいと思った。

⑥ 第3回講座 復習シート

1. 第3回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づいたことを書いてください。

・無意識に間違いを直していたり、状況で判断している日本語ならではの相手に合わせて話すことも多い。

・普段疑問を持たずに使用してきた言語が、正誤の判断が難しいものだとわかった。正誤というより、全て受け容れて対応できるといい。

・日常の中でもほぼ外国語の中で暮らしていることを意識しながら生活するようになった。

2. 相互理解にとって一番大事なことは何だと思えますか。

・伝えたいと思うこと。よく相手の話をきくこと。不明点をなくすこと。

・恐れずに積極的にコミュニケーションを取る。

・国や言葉、文化、宗教を超えて、人としてどう触れ合えるか相手を尊敬し傾聴することの重要性を認識すること。

3. さらに日本語について学ぶとすればどんなことを学びたいですか。

・わかりやすい日本語は何か。

- ・日本語に興味を持って貰うようどう初心者に向かうか。
- ・日本語の良さ、悪さ、美しさ。
- ・日本人ではない人に伝わる言葉を学びたい。

⑦ 第4回講座 ふりかえりシート

1. 外国人とのコミュニケーションに大切なことは何だと思えますか。

- ・相手の立場になること。思いやりが必要。
- ・相手の伝えたいことを理解する努力。
- ・自分たちと対等な目線で、話すこと。やさしい言葉遣いや単語を相手のレベルに合わせること。
- ・相手の立場によりそって、曖昧にせずこちらの気持ちやわからないことは、わからないと伝えることも大事。

2. 「やさしい日本語」で重要なことは何だと思えますか。

- ・何を伝えたいのかではなく、どうしたら伝わるのかを考えること。
- ・誰にでもわかりやすくするために、目的を明確にすること。
- ・小学生も理解できるような言葉を使うとわかりやすいやさしい言葉に近づくのではないかと思った。
- ・自分も意味を理解した上で、相手がわかりやすい言葉話す。
- ・伝わるように相手の立場を理解すること。
- ・本質を理解すること。

3. 今回の講座を受けて、新たに気づいたことがありましたか。

- ・日本人が美しいと感じている日本語が時には誤解を与えたり、伝わらない原因になることが多々あること。
- ・会話が成り立たないことは多くあると思うが、めげずに諦めないこと。
- ・日本語の文章の難しさ。「やさしい日本語」は実践したい。
- ・自分の理解が本当に正しいかを自信をもって相手(日本人・外国人に関わらず)に伝えることの難しさを感じた。
- ・多様性が進んでいない日本、特に外国人の少ない地域では「やさしい日本語」化はかなり遅れていると感じた。

⑧ 第4回講座 復習シート

1. 第4回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づいたことを書いてください。

- ・自分自身も正しい日本語がわからないので、相手にも求めない。
- ・多文化共生はその国を知ることから始めると、相互理解が深まる。
- ・相手に対し如何に的確にわかりやすく短いフレーズで言いたいことを伝えるかを心掛けるようになった。
- ・日本語(特に役所)の難しさを改めて感じた。
- ・市のHPに限らず、日本人が発信する情報はどこか書き手主体の

ものが多く、聞き手の気持ちあまり考慮されていないと感じてきた。

2. 身の回りで「やさしい日本語」にした方がいいと思うものを書いてください。

- ・行政などからのお知らせ、公共での説明、役所の手続きを「やさしい日本語」にするべき。
- ・健康診断のお知らせ、役所からの通達や報告書はぜひ日本人でも分かりやすくしてもらいたい。
- ・電気製品などの取扱説明書、市民団体から行政への提案書、公共施設の案内版や説明書

3. 周りの人(国籍不問)とのやり取りで、気をつけるようになったことはありますか。

- ・今後気をつけなければならないと思うことだが、「小さい子に話す」という話し方になりがちで、対等さが無いこと。
- ・少しだけだが、わかりやすい言葉を選ぶようになった。
- ・相手が本当に理解しているか見極めながら話すようになった。
- ・わからないことは、何度でも聞き返すこと。
- ・説明文などをもう少し簡略にするには、自分なら別な言い方でできるか考えるようになった。

⑨ 第5回講座 ふりかえりシート

1. 外国人居住者の方々と話して、何か気づいたこと、新たな発見がありましたか。

- ・目標がキッチリと決まっていて、自分の若い時とは違うと思った。
- ・参加した3名の方は積極的、前向きに活動していて、日本語が話せるので意思疎通ができた。
- ・多分優秀な学生たちなのだと思うが、短期間(Max5年)で日本語を上手に話している事に驚いた。また、はっきりと物事を言える問題意識も高いと感じた。
- ・学生でも日本人との交流がないこと。

・言葉の壁や文化の違いなど、具体的なことが聞けて、まだまだ日本人から発信するコミュニケーションをしなければならないと感じた。

2. 外国人住民と日本人住民の共生を目指す地域づくりのために、何をすべきか、課題を考えてみましょう。

- ・誰でも立ち寄れる場所がまず必要ではないか。
- ・交流できる場所、イベント、ボランティア活動など、一緒に何かできることを提案していく。
- ・行政が主体ではなく、民間の有志で始めた方がいいと思う。
- ・日本人との接点を増やす。コミュニティーの中で色々な催しに積極

的に参加してもらおう。

・せっかくベトナムから来ていて、料理も学んでいるので、お互いの料理をふるまえる様な機会もあればいい。

・仕事がない、物価が高いなど困りごとをどうやって一緒に考えていけるか。相談する人が身近にいない。

・互いの文化を受け入れる(日本人が知らないマナーもある)

・個人だけの意識を変えるだけではなく、行政的にも変えていかなければならないのかもしれない。

3. この地域に相応しい共生社会のために、「相互理解」「対等性」「協働」というキーワードを念頭に置きながら、自治体との連携も視野に入れて、具体的な活動を考えてみましょう。

・食文化の交流、誰でも気軽に参加できる食イベントを通じて理解を深められるといいのではないかな。

・考え方や文化の違いを認める相互理解を深めるために交流することが必要。その上で理解できれば 対等性ということがわかってきて、一緒に何かをする「協働」が実現できるのではないかな。

・キャンプや行ったつもり旅行、ベトナム料理をどこかのバーやお店でのおつまみ的に出すなどで交流を深める。

・個人で来ている人、企業がからんで来ている人たちは、分けて考えないと企業へのデメリットが出てしまう。

・サロンの場をソフト的に考え、年に1回、2回の交流会を企画。

・地域での受け入れ体制(住居やアルバイト等の補助)。そもそも地域の住民が外国人を受け入れたいと考えているか疑問だが。

(III) 苫小牧会場

① 第1回講座 ふりかえりシート

1. どんな発見がありましたか。

・外国人受け入れに関して様々な分野の方が考える場を必要としているのが新たな発見だった。

・外国人のために何かをしたい、でもどう実際に動いたらいいのかわからないと思っていいる人がたくさんいるということが発見だった。

・ベトナム人技能実習生の現状や道内、苫小牧での外国人居住の数など具体的なデータを知ることができた。

・苫小牧に外国人が800人程度居住し、地域でも交流できない状況であれば孤立している可能性がある。

・苫小牧で技能実習生として働く方が多くいることを知らなかった。私を知っている外国人の方は日本人と結婚されて住んでいる方だった。労働者として若い方が住んでいるのは知らなかった。

・地域(自治体)単位で外国人労働者に対するの対策が必要。また、それを望んでいる人々も多い。

・異文化での生活は不安が大きい、孤立させてはいけない。お互いもっと知る必要がある。

・外国人からの発信の場も求められている。

2. 自分が思っていたことと、違ったことは何ですか。

・この講座の内容が思っていたのと少し違った。外国語を学んでいるので、外国人という語に反応して参加した。

近くにいたら困っていることがあれば助けてあげたいとは思っている。

・漠然とベトナムからいらしている方達が労働力として消費され困難もあるかと思っていたが、現在でも大変な思いをされ、仕事をしている人が本当にいるということ。残念だが、よりよい方向へ力添えてきたらと思う。

・農作業、水産業などにつく外国人が多いとは思っていなかった。大都市ではなく地方では地域交流が盛んな場所がある。人材ビジネスがあることは知らなかった。

・日本語は他言語の中でも難しい言語だが、上手に話す外国人がいて驚いた。なかなかコミュニケーションがとれないと思っていた。

3. 感想&意見:自由記述

・今回の様な講座が回数を増やして行く事により異業種の方との交流に繋がり、外国人受け入れに関する和が広がっていくと思う。

・自分の情報収集能力の限界

・仕事のために遠い日本に来て暮らしている若い方達には、やはり日本のことを良い印象を持って頂きたい。私達もふれあうことがあれば、親切に接してあげたいと思う。

・興味深く受講できた。専門的な知識やリテラシーを磨けるよう努力したい。支援できるようになれたらいい。

・受講前は内容について全く想定していなかったが、非常に勉強になった。参加者からも自分と似たような話が聞けて良かった。

・北海道では交通問題は非常に高い。外国人に向けた交通整備も必要ではないかと思う。

・私の周りには外国人とともに暮らしているという実感がなかった。しかし、実際に勉強して知ることは大切なことだと思った。私達も相手の国の言葉を知ること必要だと思う。

・困っている事1位が言葉だったので、今後AIが発展してもっとコミュニケーションが取れる環境になればいい。

・介護分野では人材不足が深刻。日本人労働に頼りたいと考えるの

は、外国人への偏見かと考える。実際に働き手とのコミュニケーションの場を作ると良いと思う。また仕事に就いてからのサポートが大事。

・国際交流サロンやぐるーりワールド、留学生の受け入れなど色々関わってきたが、そこに参加していない外国人の方達に対して、つないでくれる機関を知らない。まずはみんなのできることをやろう。

② 第1回講座 復習シート

1. 第1回目の講座の後、地域の状況について確認できたことや気づいたことを書いてください。

・苫小牧地域に於ける外国人に対する情報収集力の不足を感じた。

・在留ベトナム人が2017年74人で、2020年293人と急増、また留学生が24%に対し、技能実習生が50%を占める。介護福祉士、看護に2008年インドネシア、2009年フィリピン2014年ベトナムと変化が起きている。

・苫小牧に在留外国人が800人以上住んでいる。その内、技能実習生が260人以上も働いている。報道やテレビ等で技能実習生の事を見たことはあったが、身近に多くの方が働いていることに驚いた。

・市内に800人ほど外国人が居るが近くには居ない。飲食店で見かけるが、それ以外はあまり会うことはない。

・外国人への差別、偏見があること。

2. 身近な外国人には、どんな人がいるかこれまでに経験から思い浮かべてください。

・ホテル勤務時代の各セクションに外国人がいた。介護施設での外国人スタッフ

・英語補助外国人教師、北京語中国人教師、モルモン教宣教師

・農場、コンビニ店員、ホテルの従業員

・シンガポールやベトナムからのエンジニア、留学生、ALT、英会話講師

・生涯学習講座の講師、日本人男性の配偶者

3. 外国人がこの地域で生活するときどんな難しさがあると思いますか。また、日本人ならそれほど難しくなくても、彼らにとっては難しいことは何だと思いますか。

・日本語でのコミュニケーションについては検定試験を取得している事で難しさは感じない。

・(職場の外国人が)関東に2年在住していたため、環境の違いに戸惑いを感じている。

・自分の経験から病状表現の言葉、出産し、子育てをする際の相談

・地域的には、車がなければ買い物ができないところがある。

・急病などの際、病院や救急隊、その他行政における外国語が話せるスタッフの不足

・災害に遭った時に、どこへ避難したら良いのか困ると思う。

・日本の習慣、地域活動の理解ほか。相談場所がわからない。

・来日する前、現地での日本語学校で必要最低限の日本語しか勉強していないため、来日時、日本文化、習慣の知識がなく、意思疎通が難しい。自分から不明な点を解決していくことができないでいる。

③第2回講座 振り返りシート

1. あなたのこれまでのコミュニケーションで、自分の価値観やコミュニケーション・スタイルについて、気づいたことを書いてください。

・職場では自分のタイミングで思いついた内容を話すことがあり、「あれ」等の表現をすることがある。

・人と接する仕事が多いのでコミュニケーションには困らなかったが、相手のことをもっと考えていく必要がある。

・外国人と接する機会が多く対応方法に間違いはなかったが、文化には上下がないもの、平等だと再認識した。

・自分は低コンテクストな伝え方をする割に、相手には高コンテクストを求めていた事に気づいた。

・自分の価値観を相手に押し付ける傾向があった。相手に対して常に対等であるべき。常に心掛けるよう努める。

・生まれ育ってきた環境に大きく影響を受けて価値観が出来ていると思う。親世代が男とは女とはこうだと考える様に育てられている。

・最近では、あれこれそれが多く高コンテクストな生活をしているなど反省している。

・多文化コミュニケーションを円滑にするためにも日頃から言葉で伝える努力をしなくてはならないと思った。

・日本人特有の相互コミュニケーション作用を作っていた。

・相手の年齢、家族、出身地、住んでいる場所は気になる。相手との話題、会話として共通点を見つけ、安心感を得ていたと気づいた。

それが、外国人の文化では失礼に当たると知り、今後気をつけたい。

・初対面の外国人と何を話していいかわからずプライバシーの侵害につながる質問をしていた様に思う。自分も東アジアでは同じ質問をされる時も多いので、それに違和感を覚えていなかった。

2. 多様な価値観の人々と相互理解するためには、どんなことが大切だと思いますか。

・相手が理解できているか確認しなければならない。通じていない想定をしなければならないと思った。

- できるだけわかりやすい単語を使うことが大事だと感じた。
- 相手が理解できたとは思わず、一句一句相手が確認できたか、チェックして話を進めていくことが重要だと思う。
- 相手を理解しようとする姿勢と自分を解ってもらおうとする努力のバランス。
- 常に相手に「失礼かもしれない」という気遣い
- 相手に対して相互理解を心掛けることは、常に大変な作業だという事、肝に命じる事が大事だ。
- 前回は相手方の国、文化を学ぶことが大切だと思ったが、今回は自分自身をよく探求することが必要だと知った。
- 質問することで疑問を解消。態度を明確にし相手に理解してもらう。
- 相手のいい面を引き出し理解すること。相手をわかろうとする姿勢が大事だ。
- 自分の常識は相手の非常識という言葉を念頭に、多様な価値観の人々と相互理解が深められるよう努めたい。
- 一番大切なことは相手の気持ちを理解すること。傾聴の気持ちを持って接する。自分の価値観を押し付けない。多文化の理解はみんな違ってみんないい。表情だけでなく、言葉で伝えることが大事。
- 今日の学びを糧に、柔軟に対応できるようになりたい。

④第2回講座 復習シート

1. 第2回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づいたことを書いてください。
 - 外国人とコミュニケーションをとる時に出身地や家族のことを聞いていたと思った。不確実性の回避をするような質問を多くしていた。
 - 日本人は目を見て話す文化だと聞いたが、複数人の講義やスーパーのレジなどでは目を合わせないことが多い。
 - 日本ではあまりに相互依存の日本語表現が氾濫している。日常的に意味が曖昧な表現は使わない方がいい。
 - コミュニケーションスタイルを学び、螺旋的、飛び石は日本人女性に多くいるのではないかと思った。自分自身もまさにこのスタイルである。結論を先に話してと言われる事がある。
 - 初対面は一度だけ。その時に相手への質問の前に自分のことを話してから相手に聞くことを実行したい。
 - 自分が低コンテクスト的な伝え方で、高コンテクスト・螺旋的なコミュニケーション方法の相手だと理解しにくい。
 - 外国人の方に初めて会って何を質問するかは、やはり本人自身への個人情報聞いてしまう。今後は注意する。

- 文化は平等ということを学んだ(どんなに違和感があっても)。
 - 仕事柄、その人の背景を見て関わることが多い。背景を知ることで安心感を得るのだと考える。多様化の時代の価値観が必要だ。
2. あなたは自分のステレオタイプや価値観にいくつ気づきましたか。
 - 地方は封建的で息苦しいと思っていたが、そうではなかった。
 - 中国に対し政治面のマスコミ報道は中国人の文化面も同じイメージでとらえてしまい、実際に中国人が日本人を見る(知る)見方が違っていることに気づいた。
 - ステレオタイプについては、日本が今まで歩んできた歴史的背景もあり、私自身も正にその通りだ。自分の価値観と合わない、理解しようと努力せずに自分と同じ価値観だと安心する。なぜ違うのかと深く思考していない。
 - 自分では偏見のかたまりであると思っていたが、案外違っていた。
 - ジェンダーフリーという価値観にはついていけない。美人と言ったらダメ? 男らしいもダメ? なかなか難しい。
 - 血液型で人の傾向を分析する(A型神経質、B型自己中心的等)。
 - 中国からの輸入品は安全性に欠ける、米国人は物怖じしない等。
 3. あなたがこれからコミュニケーションをするとき、何に気をつけようと思いましたか。
 - 外国人で低コンテクスト文化の人には特にだが、日本人でも低コンテクストの人もあると思うので 相手の様子を確認し、低コンテクストの人にはしっかりと細かいことまで話すようにしていきたい。
 - 外国人の場合は、目を見るのか口元を見るのか、プライバシーの侵害に気をつける。
 - 相互理解のための協働作業を心得る。
 - 人と対話する時、固定観念、先入観を持たず、そのコミュニケーションから情報を入手しようと努める必要がある。
 - 文化は対等であり、上下がないという認識が日頃から重要である。
 - 今までも相手の話を聞くことを大切にしてきたが、自分が伝えたいことは自分自身をよく知り、いかにわかりやすく伝えるかを勉強したい。初対面の方には笑顔で接したい。
 - 相手が何を伝えたいか理解するためにも、要約やオウム返しを十分に活用する必要がある。
 - 相手が嫌がることをなるべくしないようにしたいと思う。相手が言ったことを即反論しない、まずは受けとめる。
 - 人の行動には文化がある。ステレオタイプの価値観に陥らない。

⑤第3回講座 ふり返りシート

1. 講座を受ける前と後で、日本語に対する認識は変わりましたか。新たに気づいたこと、再認識したことなどを、自由に書いてください。
- ・母語として使っている日本語を改めて勉強してみると表記だけでも、漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字とあるし、難しいと感じたが、どの言語にも難しい部分も平易な部分もあり、日本語が特に難しいわけでないと思った。
 - ・低コンテクスト文化でも言語には曖昧な部分があるということが新しい学びになった。
 - ・学生時代、英語を学び、日本語がわかっていたと思ったが、本日、日本語の再勉強ができて貴重な時間だった。
 - ・日本語も時代の変化とともに用法の新しい言葉が出てきて、その時代に合わせていく必要性を感じた。
 - ・言葉の発し方で、相手の印象が変わるものであることを再認識。
 - ・日本語には他の言語とは違った特徴もあるが、特別ではなく、新たな視点を学んだ。戦後外国語を学ぶ機会も増え、今後は言語学の研究による知識を学ぶ事で、違う世界が広がり、更に自分が住む地域の言葉を引き継ぐ意識も合わせて重要だと再認識できた。
 - ・日本語はやはり複雑だ。しかし、自国や文化が一番優れているとは思わないし、他文化をもっと知りたいと思う。
 - ・日本語には色々な使い方が多すぎる。外国人が理解するにはかなり大変であると思う。
 - ・これからは通訳機器を使い、外国語を覚える気はなかったが、文法やわかりにくさを学ぶことは大事だと思った。
 - ・中国語と韓国語を学習したことがあるので、講義中の例が相手国の文化・国民性を理解するのにとても役立った。例えば、話し手責任型言語とされる中国語は意見や主張をはっきりさせる事が多い。韓国語の주야は損得勘定抜きに行動する国民性が感じられる。
 - ・日本語を日本人が話していても「てにをは」は適当に話しているが、それで通じる。話し言葉はそれでいいんだと再認識した。「お下げしてもよろしかったですか」等々過去形にしてしまう言い方には違和感がある。しかし、それも慣れてくるものなのではないか。世界に日本語語順型言語が英語型より多いことは知らなかった。
 - ・高コンテクスト文化の日本語は曖昧で、そこに丁寧語や尊敬語、謙譲語を間違えた使い方をするので、わかりずらく感じた。外国人にとっては、より難しい言語だと思う。

⑥第3回講座 復習シート

1. 第3回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づい

たことを書いてください。

- ・函館から苫小牧で暮らすようになり、標準に近づいたと思っていたが、まだ気づかずに方言を使っている。
 - ・日本語は特に話し言葉の面で曖昧な言語だと思う。行間を読む、日本文化に根付いた付度など、文面だけでは推し量ることができない意味を含むので、日本以外の人々と話す時には、十分考えて話さなければならない。
 - ・意識せずに、様々な用法で生活している外国人にとっては、表現が難しく申し訳なさを思う。
 - ・日本語を正しくつかっていないでも伝わる高コンテクスト文化は正に日本人らしい文化だと感じた。しかし、他者に正しく考えを伝えようとするのも日本人らしい一面だと思う。
 - ・日本語と同じ語順の言語が意外にも多いことに驚いた。しかも、日本語が特殊であるというエスノセントリズムという概念が生まれる。多文化共生社会ではこれが障壁とならぬよう、考え方を良き文化相対主義にシフトすべき。
 - ・聞き手が話し手の意図を推し量る言語である日本語は受信側がエネルギーを使うため、気疲れする時もある。発信側も意図しない方向に受け取られないよう気をつけなければならない。
 - ・物を与えたの言い方、英語で I gave you a book. が日本語だと、やった、くれた、もらった、してやっ た、してくれた、してもらったと利益のやり取りの意味になる。そういうことに日本人は敏感だと思った。
 - ・日常的に間違えた文法を使っている事に気づいた。恥ずかしい。
2. 相互理解にとって一番大事なことは何だと思いますか。
- ・相手の背景を理解、尊重し、違うことを前提にお互いのことを認め合うことだと思う。
 - ・お互い文化の違いを認め合うことだと思う。違う事を否定し、除外したりせずに、違いを理解し、歩み寄る姿勢。
 - ・日本語のように特殊な方言があったり、言い回しがあると理解に苦しむことは日本人同士でもある。外国人には更に想いやりを持って接することが重要だと思う。
 - ・相互理解に一番大切なのは、多様性理解だと思う。異なる立場や文化を尊敬したり、多様な背景を持つ人がとった行動の理由を理解することで相互理解能力が培われるからだ。
 - ・言葉使いの些細な語尾の違い「してヨ、してネ」等あるが、やはりイントネーション、声音で相手に与える印象は変わってしまうと思う。気持ち言葉に入る。文字面だけではなく雰囲気や相手に伝わる。

3. さらに、日本語について学ぶとすればどんなことを学びたいですか。

- ・日本語教育について学びたい。
- ・日本各地の方言話者同士で話した場合、意味が通じる方言があるかどうか。例えば、各地の接客業で理解できるのか。同じ漁師でも地域が違って共通の言葉があるのか。意味理解できるのかどうか学んでみたい。
- ・意味を間違えて使ったり、正しく使えていない日本語を具体的に学び、正しく話したいと思う。
- ・方言や言い回しによってニュアンスが変わる。標準だと思っていることが違う場合も多いので、学んでみたい。
- ・鎌倉、室町時代の人が実際にどのような発音で会話をしていたのか学ぶ予定。ポルトガル宣教師が使っていた日本語教科書が残っているが、それは京都の言葉だったそうだ。。興味深く楽しみだ。
- ・敬語や作文、手紙などについて、正確な日本語の伝え方、文字の成り立ちについて、など

⑦第4回講座 ふりかえりシート

1. 実際に外国人と話してみてもうでしたか。

【難しかったところ】

- ・日本語が伝わらなかった。／・業務用語などが伝わりにくいこと。／・日常使っている英語、外来語の言い換え
- ・相手が理解できる言葉の選択／・普段使っている言葉をすぐに言い換えること／・つい長い文になってしまった。
- ・対話というより、質問攻めに／・名前を聞き取ること、呼び方が難しかった。／・何が失礼になるか分からなかった。
- ・初めは何を話したらいいか戸惑った。／・相手に理解して答えてももらえる内容は何なのかを考えながら話すこと。
- ・相手の背景がわからなかったのも、どの程度の内容から入った方がいいのかまで時間がかかった。
- ・相手のいいところを引き出す／・日本語がよく聞き取れなかった。

【気がつけたところ】

- ・単語、単語で話すようにした。／・あまり個人的内容に踏み込まないようにした／・根ほり葉ほり聞かない。
- ・わかりやすい日本語を使って話した。難しい場合、言い換えた。／・ゆっくりわかりやすく話すこと。
- ・答えやすい質問／・言いにくいところの言い換え／・ゆっくり、はっきり話すこと／・単語で区切るように話した。

- ・安心して話ができるように心がけた／・話しやすい雰囲気を意識
- ・伝わらないと思ったところを、すぐにジェスチャーに切り替えた。／・一言で答えられるような話題を意識した。
- ・相手がわかる言葉の範囲を知るために、簡単なことを質問して時間をかけた。
- ・わからないまま曖昧にしないように気がつけた。／・相手が言ったことを復唱し、理解していることを伝えた。

【気がついたこと】

- ・北海道弁をつい使ってしまうこと。／・笑顔(表情)、うなずきで通している。
- ・困ったときに英語に置き換えると伝わると思っていた部分があったが、違うと気づいた。
- ・日本語のレベルによって、話のやりとりの広がりが違う。
- ・どんな日本語を学んでいるのかを知ってから話せば、同じ時間でも情報交換の量が増やせたと思った。
- ・丁寧語を使うと伝わりにくいこと。濁音や長音もはっきりと発音することが大切だと思った。
- ・言い換えのコツを学ぶのが重要だと気づいた。
- ・相手の方の国や習慣、食文化等少しでも情報を持っていると、会話がスムーズに行くと思った。
- ・質問をするとき、やはり高コンテキスト文化的話し方をすると伝わらないと思った。

⑧第4回講座 復習シート

1. 第4回目の講座を受けて、日常生活で確認できたことや気づいたことを書いてください。

- ・市役所のHPは詳しく書きすぎて、日本人でもわかりにくい。
- ・外国人にとり、カタカナは英語の発音をそのままカタカナにしたものと勘違いする場所があるので、和製英語というものが多いので外国人と話す時には注意して使わなければならない。
- ・外国人と話すとき、日本人と話すスピードと同じ感じで話してしまうことがあった。
- ・相手の話を聞こうとする姿勢、伝えようとする気持ちが大切。また、表情(非言語的)も重要だと思った。
- ・相手に配慮し、表情等から伝わっているかどうかを確認することは、外国人でも日本人でも同じように大事だ。
- ・よく見ると日本人でも理解しづらい文があふれている。
- ・外国人にとって話すことも難しいが、話す場合はやさしい言葉で言

い換えてもらうなどでコミュニケーションが可能だが、案内や説明する文章などの場合、難しい言葉も多く、苦勞しているかと痛感した。

・日本語の資料では、日本人同士なら理解できる表現や文章のニュアンスが、外国の方には難しいと気づいた。

共生のためには言葉のハードルを低くし、わかりやすい日本語を使って相互理解を深めることが必要だと感じた。

・日本語に対する外国人の意見を聞くビデオを見て、正しく日本語を理解できない外国人に対して、厳しいと思った。やさしい日本語で伝えるのと同時に、相手が伝えたい気持ちを聞き取ることも必要ではないかと思った。

・日本の政治家が何を言っているのか国民もわからない。ニュースを配信するメディア全体や出典元を伝えないからどこで正確な情報を取っているのだろう。

・外国人の方達と話してみても、個人情報から質問に入らなくても会話が続いた。名前の読み方や日本語が上手ですななど話している内に、日本で働いた経験や自国でどのような生活環境だったかが段々見えてきた。

2. また外国人と話す機会があれば、どのようなところに気をつけようと思いますか。

・やさしい日本語を意識して、イントネーションにも気をつける。

・来日した経験がないなど、最初に話してみれば情報がつかめるので、その日本語レベルに合わせ話をする。

・話をしている相手が意味がわからなければ、別の方法をとる。

・絵を描いた方がわかりやすければ、絵を描く。

・会話のスピード、「です」「ます」を使う。

・実際に話す場面になって、言い換えなどを考えると、なかなか浮かばなかったりもするので、日常的に相手に伝わりやすい言葉とはを意識して過ごしたいと思う。

・外国人が学ぶ日本語について知ることで、私たちから見たやさしい日本語ではなく、外国人がよく知っている日本語が使えるよう普段から準備しておきたいと思う。

・わかりやす日本語を積極的に使うことが大切だと思った。自分の使う言葉がわかりにくいという気づきを頂戴した。擬音語、丁寧語、助詞など、気づかないうちに多用し、混乱させてしまわぬよう、次回の機会に気を付ける。

・どの程度こちらの日本語が伝わるかを考えながら、相手に合った話し方が出来たら良いと思う。

・言葉が見つからなくて困っているようなら、こちらからいくつか該当しそうな言葉を書いてあげる。

3. 身の回りで「やさしい日本語」にした方がいいと思うものを書いてください。

・市役所の HP / ・和製英語(アクセシビリティ、コミット等) / ・看板 / ・案内表示 / ・説明書 /

・保育園入所の申請書類 / ・自治会の回覧 / ・ゴミ出し表 / ・市の広報

・外国人に向けばかりではなく、案内や説明の文章(掲示物、プリント、冊子など)の表記、表現が難しい。日本人でも解釈に悩む。外国人向けのものがあるとは限らないし、できるだけ簡潔なものにした方がいいと思う。

・文化庁 HP では、生活に必要な言葉がやさしい日本語に変換されていて、活動は進んでいるとわかった。住んでいる地域の生活情報や、災害時に気をつける事など、地域限定の情報をやさしい日本語にすべきだと思う。日本語にしたら役立つのではないかと思った。

・日頃、国会答弁、官公庁の広報については、理解しやすい言葉を使ってほしいと思う。

・スマホの契約は日本人でもわかりづらい。この仕組みをシンプルにして、外国人にとっても日本人にとっても住みやすい国にしてほしい。

・漢字熟語のほか、値千金、向こう数日等独特な言い方、二重否定表現など。

⑨第5回講座 ふりかえりシート

1. 苦小牧市役所の外国人職員の方と話して、何か気づいたこと、新たな発見がありましたか。

・会話の中で理解出来なかった事は、先送りせず、即日解決しようとする姿勢がある事に気づいた。

・外国人の方達も苦小牧に住む私達も互いにどこに行けば交流できるのかわからずに生活していると聞き驚いた。国際交流センターという拠点があっても交流できない現実があるということに気づいた。

・外国人と話すにあたり、私たちは困ったら英語を使おうとするが、それよりやさしい日本語を意識して話す方が通じる場合が多いということを見ると、やさしい日本語に置き換えることができるといい。

・日本語能力が高く、日本社会を熟知している外国人と、日本語がままならない外国人は全く違う印象だった。

・グレゴリーさんの話は外国人全般に関するもので、視野が広がり、王さんの話は個人的な話も具体的で理解が深まった。

・苫小牧は案外、外国人にとって住みやすいということに驚いた。
・交流したいと思っていながら、できずに帰国を選択してしまうこともある事に残念に思う。

・苫小牧で暮らし、社会に溶け込んでいると思っていた2人でさえ、文化的違いで困難や言葉の壁を感じたり、日本人との自然な交流を望んでいたことが意外だった。日本人と交流したい地域の外国人は多いと感じた。

・言語能力が低い技能実習生等を地域コミュニティに入れるため、会社の業務として日本語教育の仕組づくりを。

2. 外国人住民と日本人住民の共生を目指す地域づくりのために、何ができるか考えてみましょう。

・コミュニケーションの場を設ける必要性、地域での共生カフェ等の設置など

・地域に住む住民として出来ることは、積極的にコミュニケーションを取るのだと思う。そのため、わかりあっていないことを前提とした「対話型」社会づくりをすること。同化を求めるのではなく、外国人が入りやすい地域社会に。

・外国から来ている人達に交流の場を広めることはもちろん、私達の側もそのような機会があることを知る必要がある。どのように周知していくか、場所の設定だけではなく、工夫をしていくことが大切だ。

・スポーツなどを通じて交流する、特別扱いしない、外国人住民と日本人住民がつながる機会を作る。

・(技能実習生などには)会社への働きかけを行ない、町内会、文化イベントなどに参加してもらう。

・コロナで全然交流がない。市役所は発信しているようだが、周知できていない。

3. この地域に相応しい共生社会のために、「相互理解」「対等性」「協働」というキーワードを念頭に置きながら、具体的な活動を考えてみましょう。

・3つのキーワードに共通していることは、人間としての交流だと思う。まずは、交流の場を作ること。交流の場は形骸化しては意味がない。しっかり活動の拠点として運用できるようコーディネーターを配置し、市民ボランティアや外国人の住む町内会と連携し活動する。目標は「相応しい共生生活」なので、互いの要望をすり合わせる機会を積極的に持つこと。交流がないと分断へと進むことは明らかだ。私達は今回交流したいと集まっているので、未来は明るい。

・交流の場を企画するだけでなく、それをどう発信していくか。市

として国際交流サロンはあるが、その存在を知っている人は少ない。外国人、日本人関係なく情報が行き渡る方法を検討する。他に、技能実習生との交流であれば地域の私たちが企業に出向くことができたらと思う。今回のように、外国人とともに暮らす社会を目指している人は私達の他にも多くいると思う。「何かしたい」とか、「何かできることはないか」という人たちが技能実習生を受け入れている会社と連絡を取り、休日などの余暇を共に過ごすために訪問する。また、オンラインサロンのように集う場、つながる場があるとお互い知ることができ、更に一歩前に進めることができる。

・苫小牧市の各自治体で多文化共生、外国人担当役員をつくる。自治体に予算を組み込んでもらう。

・外国人にも町内会で行われているサロンや子ども会、廃品回収、お祭りにも参加してもらい相互理解を深める。

・子ども会でそれぞれの国の遊びを紹介してもらう。

・一緒に廃品回収に参加してもらうことで、ゴミ出しへの理解を深めてもらう。利益は町内会行事や外灯の電気代に使われたりすること等も外国人に伝えるだけではなく、町内会に加入していない人も周知することができ、町内会の活性化に繋がると思う。顔見知りの外国人となり安心して過ごすことができると思う。

・食イベント(各国の料理を日本へ紹介と同時に日本料理を外国人へ)、苫小牧らしいイベント(ホッキ貝、スケート、ウトナイ湖、ノーザンホースパーク)

【修了証 サンプル】

修了証

殿

あなたは令和3年度文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」において、学校法人北斗文化学園が主催した「外国人とともに暮らす社会について考える講座」全5回を修了したことを証します

令和3年 月 日

学校法人 北斗文化学園

理事長 澤田 豊